君との空

みるく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君との空

【Ｎコード】
Ｎ８５３６Ｘ

【作者名】
みるく

【あらすじ】
ある日、君に出会って
ある日、君に恋をして
ある日、君が怖くなる
ただ・・・あたりまえの日常なだけ。

登場人物紹介（前書き）

どんどん更新していきます＾＾

登場人物紹介

☆瞳

この話の主人公。けっこう天然だったりする。
おまけにピンチのときにものすごい悪知恵が働くので、苦労しないタイプ。
でも、不幸体質なのでけっこうピンチになる。そして歌がオンチ。美術部
身長：１５７センチ

☆彩音

この話のもう1人の主人公。背がものすごく低く子供っぽい。こいつも天然だ。
実は腹黒かったりするので危険人物だったり。実は髪の毛がきのこに似ているのでよくきのことといわれている。美術部
身長：１４８センチ

☆江藤正輝

瞳と彩音が好きな人。顔立ちが整っており、女子からよく告白されたりするが、ナルシストだ。
キレ症だが、根は優しい。目つきが悪い。サッカー部
身長：１６７センチ

☆郁

友達。かなりのヲタクで3次元に興味なし。変なところに突っかかる。美術部
身長：１５４センチ

☆サクラ

瞳と同じクラス。友達思いでとても優しい。おまけに賢いので授業とかで活躍したりする。美術部
身長：１５２センチ

☆まどか
瞳と幼馴染。瞳と一緒に学校に行くし同じ部活。おとなしいが裏が怖い。美術部
身長：１５２センチ

☆梨花
彩音と郁と同じクラス。いつもオドオドしているが少しヲタクなところがある。髪の毛が長いためいつもサクラにいじられていたり・・・。美術部
身長：１５５センチ

☆美咲
瞳と同じクラス。ものすごい天才だ。テスト２週間前になると「勉強しないとね」が口癖になるため、みんなに恐れられている。サクラと仲がよい。美術部
身長：１５１センチ

☆佳織
美咲とさくらと仲がよい。けっこうなヲタク。顔立ちが日本風の美人顔である。たまに変態発言をしたりする。美術部
身長：１５５センチ

☆仲原太郎
瞳と同じ学級委員。仕事をサボってばかりで信用にならない。野球をしているがクラブチームでしているため帰宅部だ。
身長：１５６センチ

☆大山香耶

瞳と同じクラス。アニメが大好きで将来は漫画家になるとよく言っている。男の子みたいな性格。

テニス部　身長：１５６センチ

プロローグ

「あー！！！！ひま！！」
1人の少女が運動場をウロウロする。
この日は連合運動会でいろんな学校の人がいるが、友達はみんな競技に出ていて1人だ。
知らない人ばかりで不安になった。
来年、同じ中学になる人もいるんだと思うとわくわくするが、さみしい。
少女は知らない学校のテントまで来ていた。
「蔵原小学校??聞いたことあるような・・・。」
1人で悩んでいると
「翔也！！待てよ！」という声がした。
その方向を見ると
「・・・うわあああああああ！！」
顔立ちがすごい整った少年がいた。
「世界は広いな・・・w」
少女はその少年をせつない目でしか何故か見れなかった。

これが始まり。

恋のはじまり

たったったと階段を駆け上がる。
「彩音～～！！おっはよ♪」
私は彩音の肩をぽんとたたく。
「瞳！！おはよ～。テンション高いね。」
彩音はびっくりしたように問いかけた。
「んふふ～、なんでだと思う??」
私は意地悪な顔で彩音を見つめた。
彩音は少し考え始めたが、すぐ分かったようだ。
「・・・会ったの！?」
彩音の顔が明るくなってきた。
「そう＾＾」
私はくるっと回った。
彩音なら分かってくれると信じてたよ。
とりあえず2人は彩音のクラスに入った。
彩音は3組、私は4組だ。
2人ともクラスが違うが部活が同じ美術部ということで仲良し。
3組はがやがやとうるさいが、このぐらいがちょうどいい。
「・・・・で。どうだった??」
「どうって・・会っただけだし・・・別に進展は・・・。」
私は今、恋愛中。お相手は年下の少年・・。
「しゃべりなよ～＾＾幼馴染なんでしょ??」
「そうだけどさ・・・、やっぱ無理だわ」
「へ??」
彩音はきょとんとした。
私は壁にもたれた。
「・・・・なんか・・・・無理って気しかしないんだよね。」
私はうつむいた。

恋ってこんなんなのかな??
もっと、ドキドキしたりするもんだと思ってたけど・・・。
何故か・・しない・・・。
会っても嬉しいという思いしかしないし・・・。
本当に好きなのかな??
さすがにこんな思いがあるとは言えない。
「2人とも何はなしてるの??」
郁がやってきた。
郁にはこのことは秘密なので私たちは話をかえることにした。

「恋って・・・どんなのかな??」
「ハイ????」
郁の突然のセリフにびっくりした。
「????・・・2次元に恋した??」
郁はヲタクだ。2次元にしか恋をしない少女。
なのにまさかの発言。
「あたりまえじゃん。3次元なんて・・・。」
「・・・・・。」

神様・・・本当の恋を教えてください。
もう、わけが分かりません!!!

「邪魔・・どいて。」
「あ・・ごめん。」
1人の少年が私の後ろを通った。
中学校に入学してまだ1ヶ月目。
まだ、私は気づいていません。

彼の存在に。

恋のはじまり

「あちー！！」
あの日はまだ5月だというのに、暑い日だった。
美術室でこつこつと絵を描き続ける部員。
なかには遊んでる人もいる。
「瞳～！！今日さ一緒に帰ろうよ。」
彩音が私にしゃべりかけてきた。
「いいよ??」
私はイスを机の上に置き、荷物をまとめた。
「い、今じゃないよ（（笑　４時半ぐらいかな??」
彩音はクスクス笑いながら時計をじっと見つめた。
私は顔が真っ赤になった。
「・・・・りょーかい！！！」
大きな声で答えた。
今は４時。あと、３０分だ。
荷物をまとめてしまったのですることがない。
そんな私をみんながクスクス笑う。

正直、こういうのは無理だ。

なんていえるわけがないので「笑うな～」とか言ってごまかした。
自分がよく分からない。
とりあえず『天然』で通っているけれど実際は、どうなんだろう。
自分を偽っているような気がする・・。
なんて考えても仕方がない。
頭が馬鹿だからね。

とりあえず今は、３０分まで待つ。
後のことはそれから。

・・・ひまだ・・・。

「帰るぞ～！！！」
多分この声は廊下まで聞こえただろう。
吹奏楽のかたがたすみません。
練習の邪魔になったと思います。
気にしないで続けてください。
「さようなら～」
先輩は今日は来ていないので、別に敬語じゃなくてもいいんだけどね。
学校をでてしばらく歩く続ける。
帰り道は川沿いに沿って歩く。
カモとかいてけっこう楽しい道のりだ。
けっこう進んだところに４つ葉のクローバーがいっぱい生えている場所がある。
私はそこに行ってしゃがみこんだ。
「まだ、あるのかな・・？？」
「・・・・・。」
「どうしたの？？」
うつむく彩音に私は問いかける。
私は不思議でたまらなかった。
「気分・・悪いの？？」
「・・・た・・。」
「は？？」
彩音の言葉がよく聞き取れなかった。
「なんて？？」
私はにやにやしながら聞いた。

「だーかーらー！！」

このあとに続く言葉を誰がそうぞうしただろうか・・・・。
少なくとも私は想像していなかった。
どうせ、しょうもない話だろうと。そう決め付けていたから。

「恋をした！！！！！！」
一瞬世界が静かになったような気がした。
カラスが「かーかー」鳴いている・

今日の空は綺麗だった。

恋のはじまり

「・・・・なんで、黙るのよ。」
神様、さっきの言葉は嘘だといってください。
あの、彩音が恋なんてするわけないですか。
「冗談??」
「本当。」
確かにそんな嘘は言うわけないか。
・・・それを報告するため一緒に帰ることにしたのか。
状況が分かってきたぞ。
「・・で、誰に??」
「だ、誰って!!・・・ヒントは同じクラス・・。」
「・・・私・・・3組の人分からない。」
まだ、中学になって1ヶ月目。
知らない人が半数以上いる。
当てられるはずがない。
「答えろ!!」
「えー?」
明らかにごまかそうとしている彩音。
「答えないとだめ!!」
「瞳の知らない人だよ??」
だったら分からないヒント出すな!!と言いたいがあえて我慢。
私は立ち上がった。
彩音はきょろきょろとあたりを見渡し、誰もいないことを確認すると、耳元でこっそり言った。
「江藤・・・。」
冷たい風が通った。

よかった、まだ5月だ。
彩音の顔がみるみる赤くなっていく。
頬が赤くなるのは興奮している証。
私はため息をついた。
そして目をつぶって夕日のほうを向いた。
そして大きく息を吸って叫んだ。

「誰やねんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん！！！！！」

「知らないよね。ごめん。」
彩音は謝った。
私は彩音のほうを向いた。
彩音は感想やらをまっているようだ。
私は彩音をじっと見つめてこう言った。
「今度会わせて。」
「！！！いいよ！」

そのあとしばらく話をした。
「今度、席替えがあるんだ。」
「となりになるといいね。」
実のところどうでもいいｗｗ
でも、彩音が楽しそうだからいいや。
私には関係ないけど。
恋か～、と考えてしまった。

でも、私は・・年下の川田が好きだから・・・・。

そう自分に言い聞かせたけど、

何故か心が痛い。
もしかしたらそのとき、私の心は気づいていたかもしれない。
その、江藤に私が恋をするってことを・・・・。

恋のはじまり

吹奏楽の影にいる美術部。
吹奏楽が表ならば、美術部は裏である。
誰もそんなこと言ってないけどね。でもなんとなくそう思ったりする。

また先輩がいない部室。
1年生ががやがやと吹奏楽に負けないほどの声を出している。
「キャーーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!!!!!かっこいい!!」
腐な声が聞こえるのは気のせいということで。
「ひっとみ~^^」
彩音がニヤニヤしながら私のほうに来た。
こういう顔をしているときはたいてい恋愛がらみだ。
どうでもいいんだけど・・てか、今は絵を描きたいんですけど!!
ここは無視をしよう。ということで絵をかく私。
「瞳が無視するよ~。」
明らか悪者扱い。
「何??」
「あのね~^^」
顔がきもいぞ、彩音。
「タロットって知ってる??」
「タロット??」
そういえば前、なんかの漫画であったな・・・。
「で!!それがどうしたの??」
私は席を立ち上がった。
その瞬間にイスが倒れて、ガターン!!というでかい音が美術室内に響いた。

みんなはびっくりしてこっちを見ている。
「大丈夫??」
心優しいサクラは心配そうに聞いてくれた。
「ありがと～。大丈夫だよ。」
私は爽やかな笑顔で返した。

サクラは私と同じクラスの子。
出席番号が近いのですぐ仲良くなった。
おまけに賢い。

ちなみに彩音はサクラとは反対に大爆笑をしている。
ふざけた奴だ。
「あはは!!・・・じゃあ、タロットやろう!!」
「・・・・・はーい。」
タロットのやり方はものすごく簡単だ。
適当に分けてまた1つにまとめたらいいだけ。
でもカードの絵柄の意味を理解するのが大変だ。
「このタロットはどこで買ったの??」
「ジュースについてきた。」
彩音はカードを並べながら答えた。
ダンボールの上でやっているのである意味難しい。
彩音は結果を確認した。
「普通だな～。」
苦笑いだった。
「瞳もやりなよ。」
私は説明書の通りにカードを並べる。
「好きな人を思い浮かべるんだよ。」
彩音のアドバイス。
好きな人か・・・。
私は好きな人を思い浮かべた。

でも・・でてきたのは
連運のときに出会った人。
な、何で？？？？
てか、今まで忘れていた人が何でいきなり！！
・・・この人で占うか。
「あー。」
結果を見た彩音ががっかりそうに言った。
「現在の状況は普通なのかな？？」
2人ともいまいちよく分かっていない。
「近い未来が・・・教皇だから・・・信頼関係があるって！！」
「へー。」
どうせ知らない人を占っているんだし、どうでもいいわ。
「で！！遠い未来？？が女教皇の逆さま・・・。」
彩音の顔が曇った。
「？？」
彩音は決意したような顔になって言った。
「残酷、身勝手・・・。」
もとからシーンとしているがもっと静かになったような気がする。
「へー。」
私は興味のない様に言った。
「へーって、大変だよ！！これは。」
「たいへんだね～。」
「・・・・・・。」
ついに黙った彩音。
私は女教皇が逆さまになっているカードを見つめた。
別にあの人のことが好きじゃないし。
占いはいい結果だけ信じればいいんだよ。
そのときの私はこの結果を大して気にしなかったが

このタロットの結果が、私の思いの結末を意味していたんだ・・・・・。

「あ・・・。」

「どうしたの??」

「あさって、席替え・・・・。」

恋のはじまり

「席替え～！！？？」
私は目を丸くしてびっくりした。
「そ、そうだよ！！どうしよう！」
彩音は顔が真っ青だ。
別にあわてることではないんだけど。
「占おう！！」
私はとっさに言ってしまった。
彩音は震える手でカードをシャッフルし始めた。
別にこれで決まるわけではないけど、今はこれにしか頼れない。
彩音は真剣だ。
私はとにかくそれを見守った。
「できた・・・。」
後はめくるだけ・・・。
彩音は恐る恐るカードをめくった。
せめて、これでいい結果がでて、気持ちが軽くなれば・・・。
と考えたが、現実は厳しい。

『離別』

カードはその意味をさしていた。
彩音はかたまってしまった。
空気が思い。
私はなんて声をかければいいのか分からなかった。
「大丈夫だよ。どうせ占いなんだし。」
占いだって事は分かっているが神様に見放された気分。
「あははは・・・。終わった・・・。」
彩音はそのまま帰ってしまった。

郁はそんな彩音を見て
「ケンカしたの??」
と聞いてきた。
「違うけど・・。」
気力が残っていない。
いや、本当どうしましょうかね。
席替えがこんな恐ろしいことになるとは。
恋って怖いわ。気をつけないと。

そんなこんなで翌日・・・・。

私はゆっくりと彩音の教室に入った。
席替えをしたから席が替わっている。
彩音を探したら、一番後ろの席にいた。
となりの席の人はうつぶせになって寝ている。
「あ、彩音〜??」
私は恐る恐る声をかけた。
あー!!こういうの無理!!!!!
彩音はこっちを向いた。
ん??なんか表情が生き生きしているぞ。
彩音は私の耳元でささやいた。

「となりになった^^」

恋のはじまり（後書き）

この出来事が原因で恐ろしいことが起きます。
続きをお楽しみに＾＾

恋のはじまり（前書き）

恋のはじまり

「え・・・・・。」
一体、昨日の落ち込み具合はどこへ行ったのだろう。
むかつくぐらいにテンションがあがっている。
こういうやつってすごいむかつくんですけど。
まぁ・・・それはさておき。
「よかったね。」
笑顔で祝った。
「私って運がいいのかな～＾＾」
どうせ私は運が悪いですよ。
本当、テンションがありえないぐらいにあがってるな。
良いを通り越してウザイ。
彩音はえらそうにイスに座った。
おまけに足まで組んでいる。
誰が、彩音をこんなんにしたんでしょうか。

・・・・となりのあいつだ。

彩音がウザイ発言を繰り返していたら
となりの・・江藤が起き上がった。
ボーっとしている。
ワックスで固めているのか、妙に髪の毛が立っている。
平成生まれって感じがする。
私がじーと見ているのに気づいたのか、こっちを向いた。
けっこう顔立ちが整っている。
というか、イケメンです。
彩音の動きが止まった。
江藤は私の顔を見つめた。

顔を見られるのがあんまりなれていないのでびっくりして顔が赤くなった気がした。
「江藤？？」
彩音は不思議そうに江藤を見た。
江藤は彩音のほうを向いてこういった。

「こいつ、誰？？？」

私のほうを指差している。
目つき悪ッ！！！じゃなくて！！
一言目が「こいつ、誰？？？」って失礼な！！
確かにお互い知らないけれども、もっと別に上品な言い方があるはずだろ！！

こいつ・・・苦手だ・・・。

「飯島瞳っていう私の友達。」
彩音がとっさに質問に答えた。
そこへ同じ美術部の梨花がやってきた。
「３人とも何してるの～？？」
のほほんとした子だ。
「挨拶・・。」
私は不機嫌に答えた。
「こんな奴、このクラスにいたか？？」
腹立つ質問をする江藤。
殴っていいですか？？
「３組の学級委員さんだよ～＾＾」
梨花が余計なことを言った。

それ、要らない情報（（涙

私は、学級委員をする人がいなかったのでなんとなくなった。
クラスをまとめたいという気持ちもあったが。
ちなみに、男子は、仲原太郎だ。

「ふーん・・・。」
江藤が何かを考え始めた。
嫌な予感がする・・・・。
「じゃあ・・ヘタレ委員だな！！」
自信たっぷりの表情。
私は言葉をなくした。
「へ・・・ヘタレ・・？」
彩音と梨花が唖然としている。
私は・・・
「おい・・・ヘタレって・・・私はヘタレじゃないわあああああああああ！！！！！」
怒りが頂点に達した。

そのとき、江藤は一瞬笑った。

「！！！」
その笑顔をどこかで見たことがある・・。
そうだ、あの時・・・連運・・。
あの人だ！！！
私は焦りと怒りと嬉しさがそのとき混ざっていた。

このとき・・運命の歯車が動き出した・・・・。

恋のはじまり（後書き）

やっと、再会までいったぜ♪

恋のはじまり

「はあああああああああああああ・・・・。」
なんという最悪な出会いなのだろうか・・・。
あんなにウザイ奴だとは思わなかった。
ナルシだったし。
彩音には悪いけど、いけ好かない奴だったな！！
神様！！私はこんな願い事はしていません！！

昨年。

京都の神社に行った。
そこで出会いを求めて縁結びの神様にお願いした。

「素敵な人と出会いますように・・！」

出会いはあったけどさ、何気に。
あんな風の奴じゃねーよ！！！
神様に見捨てられた。
終わった・・・・。

「瞳？？顔色悪いよ？？」
サクラが心配そうにしている。

「大丈夫です〜。」

どうしましょうか。

恋のはじまり

「ごめん・・・。」
また1人ふってしまった・・・。
「何で！！？？江藤は誰とでも付き合ってくれるんでしょ？？」
少女は涙目になりながらさけんだ。
俺は少女の目をじっと見る。
「・・・・・彼女がいるんだ・・・・・。」
「！！！！！！」
「だから・・俺は信濃と付き合えない・・。」
信濃という少女は納得したのか「分かった・・・。」と言って去ってしまった。
1人になった。
人の気持ちに答えられないというのは、なんだか悲しすぎる・・・。
俺は・・・・・・—。

「彩音〜！！」
私は彩音を探す。
明日は遠足の買出しがある。

遠足ではバーベキュウをするんだよね！！
お肉をいっぱい買わないと。
じゃなくて、今は彩音を探してるんだった。
部活中にどこに行ったんだ??あいつ。
ふと、3組を見る。
彩音がボーっとしていた。
ガラガラ
「彩音??」
私はいつもと様子が違う感じがした。
彩音はこっとを向いた。目が赤い。
「瞳・・・・。」
彩音はこっちにきた。
「江藤ね・・・彼女いるんだって・・・。」
「え???」
声が震えている。
彩音は1枚の紙を持っていた。
「それは??」
恐る恐る聞く。
まさか告白したんじゃないよね??
それはちょっと急すぎるよ。
「る・・・。」
「ん?」

「江藤のプロフィール。」

「は??」
予想外の答え。
「ここに書いてたの!彼女がいるって!!」
「・・・・・。」
なんだふられたんじゃないのか・・。
なんだかほっとした。
彼女がいてもふられてなかったらまだ希望はある。
私はそういうと、彩音は笑った。
「そうだよね・・大丈夫!!ありがとう。」
2人は作戦を立て始めた。

その会話を
信濃が見ていたとは知らずに・・・。

恋のはじまり

今日はいよいよ買出しだ！！
彩音は江藤と同じ班なので一緒に行けるらしい。
そのせいか、着ていく服ですっごい悩んだとか。
私は別に好きな人と同じ班じゃないし（てか、いない）、適当にいつものの服を着ていくことにした。
たいがい、班の待ち合わせ場所は学校の前。
私が自転車で行くと、すでにたくさんの人。
道路にはみ出てしまって、先生が注意。
その中に彩音もいた。その斜め後ろに江藤も・・・（（苦笑

げっ！！！
江藤の服かっこいいけど、目がチカチカする！！
最近の男子ってあんな服着るのか・・・。
小学校のときはみんなジャージだったのに。
彩音はおしゃれしてきたんだろうけどあいつの近くにいたら、ダサく見える。
私は班のみんなを探す。
何気にみんな近くにいた。
とりあえず、全員そろったから出発した。

し、心臓の音がすごく大きいよ・・・。
こんなに近くにいる。
しかも私服だし・・・・。
「青石??」
江藤が声をかけてきた。
私はとっさに振り向いた。
顔・・・真っ赤じゃなかったらいいな。
「お前、チビだから見えなかったし。」
江藤は笑いながらこっちにくる。
「ち、チビ!!??」
最悪だ・・・・。
「・・・・お前、私服ダサｗｗ」
江藤は私の服をじろじろ見ながら言う。
「悪かったな!!」
私は怒ったふりをする。
お、おかしいな・・・おしゃれしてきたのに。
青色のワンピース。
手にはみずいろのシュシュ。
江藤は優しい女の子が好きだって言うから優しい感じにしたんだけどな～。
失敗だ・・・。
「よし!!行くか♪」
「う、うん!!」
私の班は出発した。
私は必死に江藤の後をついていった。
男の子ってこぐの速いな・・・。
私が遅いのかわからないけれども、速すぎて違う世界の人みたい。

何故か、涙がでちゃう・・・。

恋のはじまり

「だあああああああああ！！！！！！！！みんなどこ？？？？」
店内で１人叫ぶ少女。

私だよ☆★

お客さんがこっちをじろじろ見てくる。
いや～、恥ずかしいな～・・・。
みんな、どこ？？？？？？？？
それほど広くはないが見つからない。

「瞳！！」
サクラが見つけてくれた。
「サークラー！！！！！！」
私はサクラにすがりついた。
班の男子が来た。
「迷子になるとか、ばかじゃねーの？」
なんて、ひどい言葉なんだ。
ちなみに買い物かごの中は肉でいっぱいだ。
けっこう、買ったみたいだ。
「フルーツポンチしようよ。」
私は目を輝かせていった。
「いいね～。サイダーはどこだ？？」
サイダーを探す６人組。
周りから見たら面白いだろうな。

雨が降りそうだ。
「寄り道なしで帰ろうか！！」

「そうだな。」
6人は買ったものを分けて持って帰った。
ちなみに、私はサイダーと肉をちょこっと。
ふらないようにそっと持つ。
黒い雲は私と反対に進んでいった。

そのころ・・彩音は・・。

「キャアアアア!!!!かっこいい////」
もちろん心のこえである。
江藤はポケットに手を突っ込んでいた。
めっちゃ、カッコいいんですけど~。
他の人がしたらキモイけどね。
「お前、さっきから何じろじろ見てるんだよ・・・。」
江藤が苦笑いで言ってきた。
やべ!!!!!
「・・・・ポケットに手を突っ込んでかっこつけだな~。と思って。
あはは。」
「は~??ダサい服の奴が言うなよ。」
「ダサくて悪かったな!!!!」
痴話げんかにしか見えない。

遠足楽しみだな・・・・。

恋のはじまり

ついに・・・・

遠足だ！！
バーベキュウだ！！
大縄だ！！

駅前で集合。
プリントにそうかいてあったので、私は駅前に行く。
けっこな人が集まっていた。
「瞳！！おはよう！」
郁と彩音が挨拶。
あー、わくわくする！！
遠足って最高！！！！！！！！！！！！
彩音はちらちらと江藤のほうを見ていた。
「誰を見ているのかな？？」
私はがしっと彩音を捕まえる。
「み、見てないよ。」
彩音はあわてている。
「学級委員は全員来ているか確認！！」
先生が大きい声で指示する。
あらやだ。私じゃないの。
しぶしぶ確認。仲原はあぐらをかいている。
手伝えよ・・・。

３組のほうを見ると、彩音が江藤としゃべっている。
ん？
「仲原？？」
「ん？」
「江藤の下の名前って何？？」
「江藤？？好きなのか？」
「ちがう！！」
「ふーん」
「ふーんじゃなくて！！な・ま・え！！！」
「江藤・・・・正輝だけど？？」
「へー・・・。」
初めて下の名前知った・・・。
別に、彩音に聞けばよかったけど、なんとなく仲原に聞いてしまった。
「好きなのか？？」
しつこい。
ここは無視をするのが正解なんだよね。
無視無視。
別に誰を好きになってもいいじゃん。
他の人に言う必要もないし。
他人の好きな人探っても別に変わらないし。
気になるけど。
でも、早く出発してくれ～。

恋のはじまり

肉、最高！！！！！！！！！
いいもの買ったな。みんな。
私は迷子になってたから知らないけど。
「瞳～！！そこのお肉焦げそうだからお皿において。」
サクラがてきぱきという。
「ふぁ～い。」
口の中に、ニンジンを入れながら箸をかえて肉をお皿におく。

・・・しかし・・・。
なぜ、煙はずっと私のほうに来るのだろう・・・。
煙に好かれたくないわ！！！
向こう行け！！
うちわで煙をあおぐ。
「ぐは！！飯島！！何すんねん！」
男子が私に文句を言う。
「知るか！！」
私は煙を男子のほうにいくようにする。
「ゲホッ！！」
これ以上したらやばそうなのでいったん中止。
・・・よわｗｗ

ちなみに彩音はそのとき、幸せに浸っていたのであった。
しかし、そんなもの私は知らない。
私は今、煙に夢中なのです☆

「青石さん??」
彩音は振り向く。
そこには1組の信濃さんがいた。
「なんですか??」
「青石さんってお肉焼くの上手だね～。」
「そ、そうかな??」
彩音は顔が赤くなった。
そこへ、他の班のところに行っていた、江藤が帰ってきた。
「!!」
江藤はびっくりしたような顔をしていた。
「信濃さんの班はどこなの??」
なんか嫌な予感がする。
「向こう。」
さびしい顔で答えられた。
目線の先は・・・・江藤・・・。
「し、信濃!!!!」
江藤がでかい声で叫ぶ。
「??」
彩音にはわけが分からなかった・・・。
ただ、江藤と同じサッカー部のごく数名の男子が深刻な顔をしていたのは分かった。
江藤は信濃さんを連れてどこかへ行ってしまった。
一体なんなの????

「おいし～。」
お肉って最高!!
そのころの私はお肉を食べれるという幸せに浸っていた。

「ん？」
向こうに江藤と・・・誰だ??知らない女の子が歩いている。
じっと見ていたら、江藤がこっちを向いた。
あら、やだ。江藤君不機嫌ですわｗｗ
声はかけないでおこう。

しかし・・・なんか・・胸騒ぎがする。

恋のはじまり

「きゃ！！」
今は鬼ごっこ中。
私はただの鬼・・。
ちなみに江藤も。

江藤はあのあとすぐ戻ってきた・・・1人で。
何があったかは教えてくれない。

「何で、お前に言わないとだめなん？」
不機嫌だったな。
あれ以上聞かないほうが見のため・・・だけど、気になる。

信濃さんはあの後からあっていない。

「ほい。」
「え！？」

さっきから追いかけてもつかまらない子を江藤が捕まえてくれた。
「あ、ありがとう・・。」
江藤はそのまま走っていく。

「あっやね～！！」
瞳だ・・・。
「そっちも鬼ゴッコか！！」
瞳は息を切らしている。
「そう。」
「へー。」

「そういえば、さっき江藤と知らない子がどかいってたのみたよ。」

「！！」

瞳、知ってたんだ・・。

「どこ行ってたか知ってる??」

「知らない。機嫌悪そうだったし。」

「そっか。」

ほっとしたような・・してないような・・・。

「やべ！！鬼が来た！！ばーい！」

瞳はどこかへ行ってしまった。

恋のはじまり

そもそも知ってても・・別に関係ないし・・。
付き合ってるわけでも家族でもないし・・・。
走るながらふと思う。
私は・・ただの・・・

クラスメイト・・・。

「だあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」
もう限界だ！！！
気になって仕方がない！
彩音とは反対に私はものすごく気になっていた。
とりあえず、江藤を探す。
「どこだ！！」
全力疾走で走り出す私。
さっきから彩音はテンションが低い！！
私が聞くしかないんだ！
そう思い始めたとき・・・
「あー！いたっ！」
江藤の姿だ！
私は江藤の肩をたたく。
「！！！・・・なんだ、ヘタレか・・鬼かと思ったし。」
「ヘタレじゃない！！」

というのは置いといて。
「さっき、女の子とどこかに行ってたよね～。」
「！お前には関係ない。」
「実はあったりするんだよね＾＾」
私は不敵な笑みを浮かべた。
「？？」
江藤はわけが分からないようだ。
「とりあえず・・教えてもらおうか！」
「関係ないだろっっ！！！！」
「！！？？」

恋のはじまり

「へ??」
やべ・・・不機嫌になった・・・。
逃げるか逃げないか。
でも、逃げたらだめなような気がするけど嫌な予感がする。
「あー・・・ごめんごめん^^」
軽い感じであやまった。
「・・・・・。」
こわ!!その目と無言が怖いんですけど!!誰か助けて!!!!!!
江藤はずっと私をにらむ。
に、逃げようかな??
だめだ!!!!逃げたらだめ!!
「お・・怒ってるよね・・。聞かれたくなかったかな??」
私は焦った。
「ごめん・・・・。」
それだけ言って、私はその場から逃げてしまった。
ちくしょう!!
「瞳!!でん!」
・・・・・鬼に捕まった・・・・・。

チラッと江藤のほうをみた。
「!!!」
不機嫌ですオーラーがでてる・・・。
余計なこと聞いちゃったな。
・・・・そうだ。
あの女の子からきけばいい・・・誰だっけ??
結局自由時間には聞けずじまいだった。

その後はずっと3組と行動することはなく
江藤にも彩音にも聞けなかった。
今回の遠足はわけが分からない後悔に襲われたのであった。

「部活には行くなよ。」
担任の先生たちが生徒たちに呼びかける。
今から学校に行く気分じゃないし。
モノレールの中で私はそう思った。
モノレールはゆっくりと私の家に近づいていったのであった。
「さようなら～」
私はサクラと分かれたあとに郁と彩音を見つけた。
「おーい！！」
「瞳だ！」
しばらくしゃべっているといくがいきなり
「今日の江藤さめっちゃ機嫌悪かった。」
ドキ！！
「確かにね・・・。すっごいやつあたりしてたしね。」
ドキ！！
「朝は機嫌よかったけど。」
ドキ！！
「そういえば・・瞳さ、江藤となんかしゃべってたよね。」
ギク！！
「なにしゃべってたの??大丈夫だった?」
ギク！！
「だ、大丈夫だったよ～＾＾;」
明らかに棒読みになった。
「ふーん。」
よかった、ばれなかった。

恋のはじまり

ああ・・・
私はどうすればいいのでしょう・・。
余計なことをしなければよかった・・・。

「瞳??元気ないね。」
姉の美咲が心配する。
「ん～、別に・・・・。」
私はパソコンの電源をつける。
最近私はパソコンばかりしている。
何をしているかというと、動画サイトに行ったり、絵の投稿サイトだったり学校のＨＰにも言ってる。
あと、友達のブログなど。

『ササラ様の人生相談』と検索する。
いつも迷ったときはここ。
友達関係や恋愛、家族のことを相談できるし占いもある。
占いはけっこう当たるんだよね。
友達関係相談をクリック。

『今日は遠足があったんですけどそこでいろいろあって友達が好きな男子に余計なことをきいちゃって・・、すごく不機嫌になったんです。友達はそれを心配していてとても私のせいだとはいえないんです。友達には隠し事はしたくないし・・・どうすればいいのでしょう・・・。』

具体的にはかけなかったがとりあえずこれでいいか・・。
投稿っとな。

カチッ。

それから1時間ほど別のサイトにいったりして時間つぶし。
「そろそろ見てみるか・。」
たまにめっちゃ早く返信があったりする。
もう一回検索して・・・。
「！！」
あった・・。

『状況はよく分かりませんがあなたが友達に隠し事をしたくないにはよく分かりました。しかし日にちがたってから言うと「何で今更？」となるので言わないほうがいいかも・・。時に身を任せましょう。もしばれても大丈夫です。きっとそんなことでは怒らないでしょう。もし状況が悪化したらまた言ってくださいね。成功を祈ります。』

・・・・・・。
だまされたような気もするけど・・いっか。
確かによくよく考えればしょうもないかも。
後は・・江藤の気持ちしだいだね・・。

大丈夫かな・・・。

恋のはじまり

「瞳～、おはよう。」
いつも一緒に学校に行っている、まどか。

まどかは幼馴染で同じ部活。
半分、私が無理矢理入れたんだけどね・・。
見た目はおとなしいけど中身はけっこう・・怖い・・。

「遅くなってごめん！！」
昨日は全然眠れなくて寝坊してしまった。
「瞳、すごいクマだよ！！大丈夫？？」
まどかは心配そうに聞く
「・・・うん・・・。」
急に江藤と彩音が脳裏に浮かんだ。
昨日のことも思い出した。
「・・・そっか・・。昨日の遠足どうだった？？？？」
まどかとは違うクラスだしけっこう離れている。
だから私のクラスとはまた別の時間帯にバーベキュウなどをしていた。
「お肉がすごい美味しかったよ～。」
よだれがでてきた。
「私のところは焦げちゃったんだ。」
「えー！！」

学校に着いた・・・。
江藤と会うかもしれない・・てか・・会うし。
「瞳！！まどか！！おはよう！」
何も知らない彩音が走ってきた。
うあああああ・・どうしましょうか・・。
そうだ！！真実は話さないほうがいいんだ！！
うんうん。
そうしよう。
「き、昨日のバーベキュウはどうだった？」
とりあえずこの話。
「お肉がこげてさ～。」
まどかの班と一緒だし。
「私のところもだよ！！」
まどかは大爆笑。

私はこげた話は嫌なのでそそくさと教室に入る。
「あ！！飯島！！」
朝から嫌な声が聞こえる・・。
同じ学級委員の仲原だ・・・・。
「今日の放課後、委員会あるって。」
「まじか～。」
私は嫌そうな顔をした。
「何をするの？？」
とりあえずきいた。
「昨日の遠足の反省会だってさ。」
「それだったら、お前が仕事をしてくれませんでしたって言うか。」
「それは勘弁して！！」
仕事をしないお前が悪いって言おうとしたけどやめた。
「あ！！江藤だ。」
誰かは分からないけれども誰かがそういった。

私は無意識に逃げる体勢をとってしまった。
江藤が教室に入ってきた。
うげ・・。
サッカー部の男子としゃべっている。
よし！！チャンス！！今のうちに・・。
「あ！ヘタレ。」
「！！！」
見つかった～～～！！こ、殺される！！！！
「あれ？？怒らないし。つまんね。」
そういって江藤はどこかに行ってしまった。
「・・・？？？？？？」

よく分からない・・あいつが何を考えているのかが分からない。

少なくとも私の胸の鼓動が早くなっていたのは分かった。

これはびっくりして？？それとも・・・。

恋のはじまり

・・・・・。
さっきのは一体なんだったんだろう・・・。
もしかして恋とかじゃないよね？？？

違う違う！！
きっと、びっくりしてだよ！！
うん・・・そうだきっと。

そもそも、私は彩音という江藤に恋をしている友達がいるんだ！！
だから私は少女マンガで言う・・あれだ・・・友人Ａだ！！
・・・自分で言ったものの傷ついたかも。
あああああああああああ！！！
もう分からないや。

と、授業中考えていた瞳さんでした。

「ひ、瞳？？」
彩音が話しかけてきた。
「ふぁい！！！！！？？？？？私はう、裏切ってなんかいませんよ！！！！！」
「は？？？何の話？？」
・・・やっちまった。
「今日、部活が終わったら正門の前で江藤をみ、見たいんだ・・いいかな？？」
ようするに私について来いというわけか。
「いいよ。」
とりあえず怪しまれないようにＯＫを出した。

わたし・・不自然だったかな??
夕日が長くなってきたような気がする初夏だった。

「く、くるかな??」
彩音はじっと正門を見つめる。
「そもそも、アイツは裏門から帰るんでしょ??意味なくない?」
「くるよきっと。」
彩音は真剣だった。
恋って人を変えるんだね。
「!!!!」
彩音の顔が明るくなった。
「??」
私は目が悪いからよく見えなかったけど、人影がどんどん近づいてくる。
数秒もたてば分かった。

江藤だ。

彩音の予想通り来たのだ。
私はただびっくりするしかなかった。
彩音は急に顔が真っ赤になって、帰ろうとする。
こいつは・・・。
「あ・・へタレ。」
江藤がまた私を馬鹿にする。
「誰がへたれじゃあああああ!!!!!!!!」
怒ってしまった・・・。
へタレって言うあだ名やめてほしいんですけど。
言っても聞かないと思うけど。
「ばーか。」
「!!!」

はらがたつ奴だ。
「ば、ばかやろーーーーーーーーーーーー！！！！」
何で彩音には何も言わないのさ！！！！
そして馬鹿にするな！！
「はは。」
江藤が笑った。
ドキン！！
「・・・・！！！！！！」
え??なにこれ！！
あ??う??
こ、こえだしすぎた??
ち、違う！！
これは・・・・・恋だ・・・。

恋のはじまり

「瞳・・最低・・。」
教室の端っこで黒いオーラーを出している彩音。
「・・・わざとじゃないんだよ・・。」
教室のど真ん中で正座をしている私。
とりあえず2人は空気が重かった。
原因は4時間前の出来事・・・・

「!!!」
私が3組に行くと、彩音のイスに頭を自分のイスに下半身を乗せて寝ている江藤がいた。
「・・・。」
私は恋をしていたことに気づき顔が赤くなった。
「・・・。」
無言で立っている彩音。
「何をしてるの??こいつ。」
私は江藤を指差しきいた。
彩音はため息をつき、苦笑いで言った。
「イス寝。」
こいつ略しやがった・・。
というのは置いといて。
彩音はじつはさっきから顔がにやけている。
私はなんかむかついたので
「きゃ!!!」

スカートをめくってやった。
我ながら変態だ。
「何をするのよ！！！！！！」
彩音はあわてている。
「なんならもう1回するけど??」
・・・馬鹿だ私は。こんな事を言うから・・
あの悲劇が起こったんだ。
「え??ちょ！！！！！」
思いっきりスカートをめくった。
よし、誰もみていな・・・・
「アアああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」
寝そべっていた江藤の目が見開いている。
待て待て待て！！！！！
何で今、目を開けている！！！
ねるんださあ！！お願いだから目を閉じてください！！
1秒が6秒ほどにかんじるスロー。
頭の中で流れている残念な曲。
みるみる顔が赤くなる彩音と江藤。
私、どうすればいいでしょうか
終わった・・・・・。
と思ったらスカートが元に戻った。マジで終わったし。
「瞳！！変態！！！！！！！！！！！！」
どうやら、江藤が見ていた件については気づいてないようだ。
江藤は寝たふりをする。
ごめんね。

これが原因。

「本当!!ごめん!!」
私は土下座をする。
「・・・・。」
無言の彩音・・・・。
「いいけど。」
ボソッと言われた。よかった。

こんなあたりまえが幸せだったんだ。
だけど・・この幸せを壊したのは私。
罰がきて当然だ・・・・。

恋のはじまり（後書き）

明るい話はここまでだと思います。
次からはちょっと深刻に・・・。

恋のはじまり

「・・み・・・と・・・・瞳！！」
「ぐはあああああああああ！！！！！！」
誰かの声によって私は起こされた。
ただいま部活中。さすが美術部です。
「やっと起きた。」
おこしてくれたのは郁。
「・・・夢を見た・・。」
「は？？」
「なんか・・失恋したり、チョコレートを江藤が噛み砕いてたり、
机に落書きされたり、紙がびりびりにされてたり・・・。」
私は青ざめながら言った。
「・・・リアルな夢ですね・・・。」
明らかにひいている郁。
夢だからどうでもいいけどさ。

今日は、彩音に江藤のことを言う日だ。

さっき決めた。
「あ、彩音？？」
私は震える声で呼んだ。
「何？？」
梨花とじゃれあっている彩音は笑顔で振り向いた。
「いいたいことがあるんだ・・いい？？」
「どーぞ。」
言うぞ！！真実を！！
「じつは私も江藤の事がす、好きなんだ！！！！！！！！！！！！！
！！！！！」

もう・・友達に戻れないかもしれない。
しゃべれないかも知れない。
邪魔されるかもしれない。
それでも・・・真実を・・。

「あ・・そうなんだ!!!やっぱり??かっこいいもんね^^」

「!?」
意外な反応だった。
「お、怒らないの??」
「あたりまえだよ。友達でしょ!?」
な、泣ける。いい友達を持った・・私!!
「じゃあ・・ライバルだね!」
「ら、ライバル?」
私は少し心が痛くなった。
まさかのライバルだとは・・・・・。
私は彩音に勝たなければならない。
譲るなんてなし。もし負けたら・・・。
考えたくもない!!
とにかく!!負けるわけにはいかないんだ。
「・・・いや?」
彩音がにやっと笑った。全身に寒気が走る。
「・・嫌じゃない!!」
私は強気で言った。負けたくない!!ただそんな思いで・・・。
「分かった。お互い頑張ろうね。」
彩音は笑った。
「うん。」

運命の歯車

彩音はあの日からも普通に接してくれた。
特に変わったことはなく、いつもどおりの生活を送っていた。
そんなときに片思い中の私たちには最悪な休みが来た。

夏休み

「しばらくあえないじゃん！！！！！！！！！」
なげく彩音とは反対に私は何故か冷静だった。
「あっちも部活があるし大丈夫じゃない？？」
美術部は何気に活動が多い。運動部よりは少ないけど・・・。
もちろんサッカー部もある。
窓からは中庭が見えるのでそこで練習している江藤がみれるというわけだ。
しかし、そこでへりくつを入れるのが彩音だ。
「でも、しゃべれないじゃん・・・。」
頬を膨らませて文句を言う。
私は正論を言われたので返す言葉もない。
ただ時間が過ぎていくだけだ。
「じゃあ、告白してさっさと付き合って一緒に遊べばいいじゃん。」
私はさらりと言った。
彩音は
「いいの？？私が勝って。」
といった。相変わらずむかつくチビだ。
「嫌だ。」
私は無表情で言った。誰かに取られるなんて嫌だし！！
でも、となりの席の彩音は有利だ。
しばらくあえなくても強く印象に残っている。

・・・じゃあ・・私は？？
少し仲がよくなってしゃべっただけのヘタレ委員。
印象悪！！何とかしなければ！！！
といってもしようがない。どうしよう。
彩音がいなければ今の状況を保つことはできない。
席替えとかで彩音が江藤としゃべれなくなったら・・・。
考えるだけでもゾッとする。
・・よくよく考えればいっぱいしゃべれるのも今のうち・・私も・・
彩音も・・。
江藤は小学校のときたくさんの女子に告白をされたらしい。
今だってそう、私と彩音のように思いを寄せている人もいれば、すでに行動をおこしている人もいる。
ふられたからって諦める人なんてそうそういないと思うし・・・。
さきに行動をおこした人が勝ち。恋なんてそういう世界だ。
彩音だってそれを分かっている。
だから・・・・。
「今のうちにたくさんしゃべらないと。」
彩音は真剣だ。私も。
・・・頑張らないと！！！

夏休みまであと2週間のときだった。

「正輝！！ボールなおしてくれ！！」
部長の声に江藤は反応する。
「分かりました！！！」
急いでボールを直す。
その時、ポケットに入れていた携帯がなる。

ちなみ学校には携帯を持ってきてはいけない。
「やべ。」
あわててみる。
『今日、会えるかな??　　美里』
そうかいてあった。
江藤はため息をつき、ボソッとこう言った。
「・・・そろそろ、本当のことといわないとな・・・好きな子ができたから別れてって・・・。」

運命の歯車

ただ恋に臆病なだけじゃ1歩も進めないんだ・・・。
そう自覚し始めた夏休みの近くの日のこと。

「夏休みの予定のプリントを配るで。」
ウザイ顧問が部員にプリントを配りだした。
肉だらけの体系なので見ててうざい。おまけに性格も。
「けっこうあるじゃん。」
郁はプリントを見て目を輝かせた。もちろん私も。
1週間に2回はあるペースだ。ラッキー。
彩音は何かを計算している。あやしい・・・。
「何をしてるの??」
私はそっと覗き込んだ。
「合宿・・・。」
「は??」
「サッカー部の合宿の日を調べてるの!!」
そこまできれなくても・・・。
彩音が言うには、江藤は合宿の日を日にちではなく始業式の前の3週間前といったらしい。
めんどくさいこというな。合宿とかどうでもいいや。あえないし。
「合宿って何をするのかな??キャンプファイヤーとか??」
お前が行くんじゃないだろう。
そもそも、合宿でキャンプファイヤーとかはさすがにないだろう。
練習をするんですよ。しかも男だけでしたら暑苦しいだけじゃないか。
「話し聞きなさい!!!!!!!!!!」
「!!!!!!!」
顧問が怒り出した・・・。ここは素直に聞くか。

「写真見せてくれるかな？？」
まだ妄想に浸っている彩音。おそらく無理だろう。
「今日はここまで。戸締りちゃんとしてや！！！」
今日もウザイ顧問でした。
「ねーねー、知ってる？？」
郁がニヤニヤしながら言った。
どうせアニメなどの話だろう。そう思っていたが・・・
「江藤って彼女いるんだって！！」
「「！！！」」
・・・・・・・・。
・・・・マジか！！！？？？？
さらりと言うなよ～！！！！！！！
嘘でしょう！！！？？？
誰か嘘だといってー。
「なんかこの前、彼女変えたとか言ってた。」
まじかー・・・前、いたのか！！！！！
「でも好きじゃないとか・・なんチャラ・・。」
じゃあ、さっさと別れろ。
我ながら怖いな。うん。
「前の彼女には好きな子ができたとか言って別れて新しい彼女作ったとさ。」
お前はプレイボーイか！！
「そうなんだー。」
私は冷めた目で言った。
そういえば、さっきから彩音の声がきこえないんですけど・・・。
嫌な予感がするのは気のせいですよね？？？
私は後ろを向いた。
後ろには石になっている彩音。
「わあああああああああああああ！！！！彩音！！！！！！？？？？？？」

現実的に言うと放心状態。
おそらく思考回路が壊れたのであろう。
「・・・は！」
気がついたようだ。
「・・・で、何の話??郁。」
「さっき言ったじゃん。」
「そうなの??」
聞いたらだめだ！！彩音！
そうして結局聞いた彩音でした。

夏休みやばいとか言ってる場合じゃないし。
ん??彼女がいるんだったら、夏休みは
遊園地行ったり・・・
映画見に行ったり・・・
サッカーの試合を見に行ったり・・・
家にいったり・・・・
い、家ええええええええええええええええ！！！??????
それはまだ早いよ！！ぜったい！！
「瞳??」
彩音が不自然な行動をする私を見て変に思ったらしい。
「・・・な、なんでもないよ。」
へんな妄想をしてしまった。馬鹿だ私。
さすがにそれはない！！うん。
・・・だといいけど・・・。
あ！！でも好きじゃないんだったらしないよね。
よかった。これでしないという核心につけたぜ。
さすがのこのことは彩音にはいわないでおこう。
変態よばりはされたくないし。

というへんなことを考えてても時間は過ぎていくのであった・・・。

運命の歯車

「では、終業式を終わります。」
校長先生が長い話をした後はけっこうきつかった。
世間話は正直どうでもいい。それとサッカー部の話はしないでくれ。
今日はほとんど教室にいることが多いので江藤とはしゃべれないだろう。
見ての通り進展のないまま夏休みを迎えるのでした。
通知表とかいらないから江藤としゃべる時間をください。
なんて言えないしね。
私は自分の教室に入るのでした。
「瞳、今日は部活あるの??」
サクラが体育館シューズをロッカーになおしながら聞いてきた。
「あると思うよ。」
私も体育館シューズをなおす。
「そっか~。お弁当忘れたから1回帰るね。」
「了解。」
そのあと、休み時間がきた。
江藤はどこかに行ったらしくていなかった。
「多分・・6組だと思うよ。」
彩音は机にうつぶせになりながら答えた。
「何で瞳は江藤を探してるの??」
梨花は不思議そうに聞いてきた。
「え??いや別に・・いつも隣にいるのにいないなと思って。」
嘘ではない・・と思う。
よく考えればいつも彩音のとなりにいるな、あいつ。
私は江藤のことは何も知らないけど、彩音は私より多く江藤のことを知っているような気がする。
夏休みってなんかひどいな。

恋の邪魔をするもんね。
消極的な人には邪魔をするって軽いいじめじゃん。
積極的な人がうらやましいよ。
「夏休み楽しみだね～。」
空気を読めない郁がきた・・・。
「プール行こうよ！！あ～わくわくする。」
「・・・・そっか。」
明らかさめた目で見る3人組。
そうこうしているうちにチャイムが鳴った。
「バイバイ～。」
そういって私は3組を後にした。
4組にはいって席に座ったところで窓から江藤が見えた。
もう・・しばらく会えないんだな。
そういう思いしかでてこなかった。

「こんにちは・・。」
1番のりで部室に入る。
誰もいない美術室はシーンとしていて不気味だ。
おまけに窓を閉め切っているからか重い空気が流れる。
私はかばんを机に置いて窓を開ける。
向こうの校舎には廊下をウロウロするたくさんの生徒が見える。
4階を見ると階段のほうに江藤の姿が・・。
今から部活なんだろうな。ユニフォーム着てる。
「こんにちはー！！！！！！！」
郁達3組がきた。
そのあとに4組の私以外のサクラと美咲が来た。
そして5組の佳織が来た。
続々と部員が来たのであった。

そしてみんなでお弁当を広げて昼食に入った。
「夏休みどうする??」
1番楽しみにしている郁が聞いた。
「私たちは塾があるし。」
サクラが答える。
「私も。」
私も答える。
「え??」
残った彩音。どうやら暇人らしい。

夏の暑さが体にしみこんできた最後の日だった。

運命の歯車

終業式の日。
彼と一言も交わさずに夏休みを迎るはずだったのに。

「あーーーーーーー！！！！！忘れ物した！！！！！！！！！」
部室で大声で叫ぶ彩音。
「何を忘れたの？？」
私は聞いた。
「国語のノート。」
あらま。持ってこないはずの物を忘れましたね。
「取りに行くからついてきて。」
「いいよ。」
こうして2人は鍵を取りに職員室に向かうのでした。
職員室に入った。
「あれ？？鍵がない。」
彩音は鍵が置いてあるはずの場所を目を丸くしてみる。
私は身をのり出してみるが確かにない。
「誰かがすでにもっていったのかな？？」
とりあえず私たちは教室に向かった。
あいてなかったら笑えるけど、ないから仕方がない。
1年生の教室は4階にあるので上るのはきつかったりする。
「やっぱりあいてる。」
何故かあいてる教室の中をのぞいて私はびっくりした。
だってそこには江藤がいたのだから。
「「えええええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！」」
突然の出来事に2人は大声を上げた。
待て待てなぜあいつがそこにいるんだ？？？？

サッカー部は今、練習をしているはずなのに。
「な、何で??」
彩音もそういうしかなかったようだ。
「俺がいたらだめなのかよ。」
江藤は苦笑いで言う。
「いいけどさ・・今部活してるんじゃ・・。」
私はもしかして錯覚ではないかと疑ってしまった。
「忘れ物・・したはずなんだけど見つからないし。」
江藤は困った顔になった。
「わ、私も忘れ物したんだ。」
彩音は机の中から国語のノートを取って見せた。
ピンクのノート。
私は江藤の机によって置くに詰まってるんじゃないかとのぞこうとしたら
「勝手に見るなよ。」
江藤がそういった。
「ごめん。」
とっさにあやまってしまった。
「ちなみに中は空っぽです。」
江藤は私のほうを見ながら言った。
私はその声で江藤を見たとき、目が合った・・・。
普通すぐにどっちかが目をそらすはずなのにまったくにそらさない2人。
私は多分、嬉しすぎてそらさなかったんだと思う。
でもさすがに3秒ほどしたらそらしたくなるのが普通。
だけど江藤はそらさなかった。
だけど・・私がそらしちゃった。
顔が熱い。真っ赤だろうな。
「あ・・。そらした。」
「!!!!!!」

体温が急上昇したような気がする。
にやけてるかも知れない。
ん？待てよ・・もしかしてアイツはゲームのノリでそらさなかったとかないよね。
うわー。何気にショック。
！別にロマンチックなのを求めてたわけじゃないけどさ。
ゲーム感覚はちょっとね。
「江藤！！あったよ。」
彩音が数学のノートを江藤に見せる。
確かに江藤のだ。
というか、２人ともなんでノートを持ってきてるんですか？？
今日は授業はなかったんですけど。
・・・あえて聞かないでおこう。

そんな感じでちゃんとした今日のいや『人生で最後の』ちゃんとした会話は終わったのでした・・・。

そのときはまさかこれが最後だとは思わなかったよ。
まさか夏休みが終わっても、会話ができないって誰が想像したんだろう。
このときはまだ物足りなかったけどこんなささいな会話が幸せなことだとは思ってもなかった。

運命の歯車

夏休みになったが1回も江藤と会わずに2週間がたった。
「部活黒板に予定を書いてくる〜。」
暑さにやられている私はふらふらしながら美術室を出る。
後ろから彩音が追ってきた。
「今日はサッカー部がいた。」
「まじか！！」
階段を下りながらひそひそ話。
サッカー部にはよく会うが江藤とは会わない。
私たちは2階の渡り廊下を通ろうとしたとき
「「！！！！」」
江藤がベンチに横になっている。
でたアアアアアアアアアああああああああああああああ
あああ！！！！！！！！
今日はナンテ幸せなんだろう〜。
「・・・・。」
2人は無言で歩く。すると彩音がいきなり走り出した。
「え？？ちょ！！」
私は彩音を追いかける。
「もうかいてあるし・・・。」
彩音は部活黒板を見ながらつぶやく。
「帰るか・・・。」
「うん・・・。」
無駄な努力をした。
するとまた、彩音は走る。
「おい！！！！」
私は追いかけたとき

「お前らが走ったら廊下がゆれるんですけど！！！！！！」
江藤が不機嫌に起き上がって言った。
「え？？あ・・すみません。」
いきなりのことだったので変に謝ってしまった。
江藤はまた寝転がって寝だした。
「・・・。」
ん？？待てよ？？ゆれるってことは・・・
私は体重が重いってことかい！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！
アイツ何気に失礼な奴だな！！！！！！
レディに向かって重いとは。
誰もそんなことは言ってないけど。
夏休みにしゃべったのがこれだけ。
ね？まともな会話じゃないでしょ？？

運命の歯車

「あついいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい。」
今日は彩音の家で遊んでいる。
遊ぶといってもパソコンをしたりして。
「ねーねー。面白い画像とかないの??」
パソコンをいじる私。
「そのパソコンはお父さんのだから変にさわらないでよね。」
彩音がゲームをしながらこっちを見る。
「はいはい。」
常識的なことを言われたのでイラッときた。
とりあえず動画サイトにいく。
「見たいのある??」
彩音に聞いた。
「私の家のだから普通は私が聞くんじゃ。」
彩音はこの不自然さにあきれていた。
「・・・・。」
動画サイトを閉じて学校のＨＰにいった。
もしかしたら日記のところに江藤がのっているかもしれない。
サッカー部はのっていたが江藤の姿はなし。
そもそも、誰が誰だかさっぱり分からない。
んーーーーーーーーー。
よく見ても分からない。それっぽいとかも分からない。
私はあることを思いついた。
江藤の出身校の過去の日記を見ればのってるかも。
４年生のときとかのかわいいレアな写真とか。
まずは検索。
「・・・・・・・・。」
見つからなかった。

私は頭をかきながら本名で検索することにした。
『江藤正輝』
もしかしたら小学校のころに所属してたチームとかでヒットするかも。
「・・・・・・。」
同じ名前はたくさんいたが本人はいなかった。
「だアアああ！！！！！！」
私は寝転がりながら叫んだ。
「ウぎゃ！！！」
彩音は私のおたけびにびっくりしたようだ。
「ああ・・・負けたじゃん。」
文句を言ってきた。
「知るか。」
仕方がないので自分の名前で調べてみた。
モデルさんとかがいっぱいいる。
あー、私と違って美人ですね。腹ただしい。
こんな風にかわいかったら・・今頃・・・。
「なに考えてるんだ！！私！」
彩音は無視。
今頃といえば江藤は何をしてるのかな・・？？
・・・まさか彼女とデートとかはないよね。
いやいやいやああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！
考えないでおこう！！嫌なことしか出てこない。
窓から外を眺めた。
中学校は彩音の家から近いが建物でまったく見えない。
夏の風に当たって少し目をつぶってみた。
でてくるのは江藤の顔ばかり。
いつの間にこんなに好きになってたんだろう。

最初はただのむかつく奴だったのに・・・・。
好きだと気づいたらもっと好きになってる。不思議だ。
机の引き出しを勝手にあけてみた。
「！？」
ポエムらしき紙が・・・。・・・気づいていないな。読んでみよう。
「ぷぷぷぷぷーーーーーーーーーーぶ！！！！！」
私の笑いをこらえる声に気づいたのか彩音が紙を取り上げる。
「なに、勝手によんでんねん！！！！！！！！！」
「彩音もオトメなところがあるんですね～。」
ニヤニヤする私の頭を彩音はたたいた。
「いて！！！」
「勝手にあけるなよ。」
怒り心頭の彩音は紙を引き出しの中にしまった。
ちなみに3枚ほど引き出しのなかにポエムはあった。
ひまだ。

番外編　毛虫との空

君もこの空を見上げてるのかな??
そう考えたくなるほどの青いい空だった。
本日も部活であります。相変わらず2年の先輩はあんまり来ないけれども頑張っております。
「みんな来ないね・・・・。」
「うん・・・。」
2人でさみしく正門の前に座ってみんなを待つ・・。私と彩音だ。
今日はサッカー部は午後からしく中庭はさみしい。
運動場ではテニス部が肌を真っ黒にして走り回っている。
「そういえば、江藤って肌が黒い子が好きなんだって・・・・。」
「趣味悪いな・。」
ボーっと空を見上げた。雲1つない空。
むかつくほどに綺麗だったな・・・・。
「飛行機が飛んでる・・。」
「足元に毛虫がいるね・・・・。」
「は・・・?」
彩音の変なセリフに私はかたまった。私はそっと下を見ると・・・
「うぎゃあああああああああ!!!!!!!毛虫!!」
大きな毛虫がいた。なんて気持ち悪いんだろう!!!
むにゃむにゃと動いている。
「き、きも!!!!!もう、上に上がろうよ!!!」
そうして私たちは階段を上がった。
「・・きもかった・・。」
脳裏に焼き付けられたあの姿はその日、ずっと再生されていたのであった。
「あーもー!!忘れたい!!!」

「あははは。」
笑うなはげ！！そういいたいけれども我慢だ。
・・・なんか眠くなってきたや・・お休み。
「おい！！」
私は深い眠りについたのであった。

ここはどこだ？？向こうに山があるぞ？？行ってみよう！！
・・！！？？ああああああ・・・
毛虫だアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！
うわ！！追いかけてくるよ！！きもい！！
誰か助けてーーーーーーーーーーーーーーー！！

「は！！」
目が覚めると美術室だった。
・・よかった・・・。
その日・・帰るときにはペッちゃんこになっていました。

運命の歯車

「あーーーーーー・・・・・。」
私が学校につくと中庭でサッカーをしている江藤を見つけた。
私には気づかない江藤。なんか面白いな。ドリブルをしている。
どうやったらあんなふうにできるんだろう・・・。不思議だ。
「瞳??」
彩音が上履きを履いて出てきた。こいつはいつも早いな・・・。
「おはよう。」
「セミがいっぱいいるんだよ!!!!!!!!!」
「何!!??捕まえるぞ!!」
相変わらず馬鹿な話をする2人。そもそも捕まえられないだろう。
私たちは池のほうへ行った。セミの声がうるさい。
「あんな高いところにいる・・・。」
彩音は残念そうに見る。私は彩音の視線の先を見た。確かにセミがいる。
「・・あー。アレは無理。」
なんだかセミに見下されている気分。嫌だな。
セミは鳥じゃないのに空を飛べる。私も飛んでみたいな。
なんてロマンチックなことを考えていた。
「他探そう。」
彩音は体育館のほうへといった。私はとりあえずついていった。
「!!!!!!」
木の下のほうで休憩をしているセミを見つけた。悪いけど捕まえますね。
そーっと忍び寄ったと気に感づいたのか逃げられた。
一気に空高くに飛んでいった。まるでさよならのように。
「う・・。」
セミのおしっこが頭にかかった・・・。不幸だ。

夏休みはこれといっていい思い出がなかった気がする。
印象的なものがないのかな??そんな気がするよ。
とりあえず2学期は体育大会がある。
江藤のかっこいいところをみれて幸せになって翌日からは仲良くなれたらいい・・そう思っていた。
だけど願いというものははかない。
現実というものは残酷。

私は・・・・・。

運命の歯車

今から私が後で知った話をしましょう。私が知らない話・・・・。

「え・・江藤・・何かな??」

1人の少女は何かわくわくしながら江藤がしゃべるのをまっている。

だが、江藤の顔つきは険しい。

「・・お前・・どういうつもりだよ??」

江藤は低い声でしゃべりだした。少女は顔色を変えた。

「信濃・・俺はお前をふったはずだけどさ。」

江藤はため息をつきながら言った。状況は深刻だ。

トイレの前なのでおじいさんとかがチラッとこっちを見てくる。

「・・私はただ青石さんとしゃべりたかっただけだよ???」

信濃は自信満々の顔つきで答える。江藤は下を向きこう言った。

「じゃあ・・何で俺のほうを見ながらアイツとしゃべるんだ??」

決定的な一言。

「・・それは・・・・。」

「・・何かたくらんでるだろう。」

「・・・・。」

黙ったままの信濃についに江藤はついにきれた。

「てめー、ふざけんなよ!!!!!!???????」

信濃はびっくりした。

「俺はお前のことを好きではない!!!!!うぬぼれんなよ!!!!」

心が痛むようなセリフだ・・。信濃は涙目になった。

「大体なんであいつにちょっかいをかけるんだよ!!あいつは関係ない!!!!!」

「・・・あの子は江藤のことが好きなのよ!!!!!!」

信濃はとんでもないことを言った。

「・・・そ、そうなのか??」
江藤は突然のことに目を見開いた。信濃はそのまま女子トイレの中に逃げた。
江藤はこのまま出てくるのを待っても変に期待をさせるだけなので戻っていった。

これが後から聞いた話。私には関係ない、そう思っていたんだけどな・・・。
同じような出来事が1年後に起こるとは知らずにね・・・。

運命の歯車

恐怖の夏休みがついに終わった。
思い出といわれたら、塾ぐらいかな??あんまりいいことなかったような。
はっきり言ってつまらない夏休みだった。プールにはいってないしね。
始業式もつまらなかった。江藤とはしゃべっていない。
しばらく普通の生活が続いた。
2学期が始まって数日後のことだった・・・・。
「・・・どうしよう・・・。」
彩音は渡り廊下で顔を青白くして悩んでいた。そのとなりに私は立っている。
「いつかは必ず来ることだよ・・。」
じつは彩音のクラスでは席替えをすることになった。ようするに江藤と離れるということだ。
1回なったからもうなることはそうそうない。誰もがわかることだ。
「・・・・・。」
黙り込む彩音。あたりまえだ。どうしようもないのだから。
「あのさ・・。」
私は『そんなことで悩むな』といおうとしたが彩音の顔を見て声を止めた。
彩音は涙目になっていた。今にも泣きそうなほど・・・。
それほどつらいことなのかな??私はすでにクラスが違うから分からない・・・。
「・・今までとなりですごく近かった・・。」
彩音が語り始めた。
「なのに・・離れちゃんだよ!!??もうしゃべれないかも!!!!!」

彩音の目から涙がこぼれた。
「・・・・。」
私は黙っておくことにしたが、状況が状況なのでこういった。
「別に江藤が死ぬわけでもないし・・・。」
説得力のない言葉。自分でも分かっているがどうしようもない。
だけど・・これが少しでもすくいになればと思った。少しでも・・・。
「だけど・・・。」
まだ駄々をこねる彩音。おもちゃを取り上げられた子供のようだ。
「・・・っ!!あのね!!もしずっと一緒にいられるようになったとするじゃん。」
私の突然の言葉に彩音は目を見開いた。正直自分でも何を言おうとしているのか分からない。
「付き合うことになったとか、結婚することになったとか何でもいい!!」
彩音は涙を拭いた。
「だけどいつかは人は死ぬ。死んだら本当にしゃべれないし会えない。」
「・・あ・・・。」
「だから・・・そんなことでいちいち悩むな!!!会えるんだから!!!」
私は頭をフル回転させて、決定的なことを言った。
彩音は笑った・・・・。
「ありがとう。少し考えすぎていたかも。そ、そうだよね・・。」
切ない笑顔。見ていられなかったけど私は一安心をした。
後は結果だな・・・。
もしものときのために私は手紙でも書いておくか。離れたときように。
彩音はすごく江藤がすきなんだな・・。ちょっと羨ましいかも。

私も好きだけど・・・環境が違う。クラスが違うから・・・。
本当だったら接点がないはずの私と江藤。しゃべれただけでも幸運だと思わなければならない。
そう思うと彩音に感謝がしたくなった。でも照れくさくてできない。
私がもっと大人だったらな・・・・。

思いの結末まであと・・・1ヶ月だとはまだ知らない。

運命の歯車

私は昨日必死で書いた手紙をかばんの中に入れ、家をでた。
今日は雨だ。これからのことを物語るような空。いやだな。
まどかとの待ち合わせ場所に行くがまだ来ていないようだ。
小学生が集団登校で歩いていくのを見ながら私はため息をついた。
よくよく考えると、彩音と江藤が離れるとこっちにも影響がでる。
どうしようか・・・。
そんなことを考えても今はすでにもう結果がでてる。かえられない。
「瞳～、遅くなってごめん！！」
まどかが走ってきた。スカートがいつもより短いのは気のせい？？
「・・・スカート・・・。」
私が不思議そうに言った。まさかの不良デビュー！！？？
まどかは苦笑いでこう言った。
「いや～、長かったら不良だと思われそうだし。今はさ長いのがはやってるじゃん。」
確かに。何故か最近は、ロンスカといってスカートをずらしてはくのがはやっている。
短いほうがまじめに見えたりするのだ。
「なるほど。そういえば今日はさ、国語があるんだけどさ・・・。」
私はさりげなく話題を変えた。どんどん学校に近づいている。
あーだこーだ言っている間に教室へ。
ざわめいている3組をよそ目に私はとなりの自分のクラスに入った。
サクラたちがいない。いつもならこの時間にはいるはずなのに。
おそらく4組だろう。結果を見に行ったのしか思いつかない。
私はかばんを机に置いて、早歩きで4組に行った。
黒板の前にはたくさんお人が席替えの結果を見ようと集まっている。
私は彩音を探すが見つからない。いつもは見つかるのにね。
「瞳！！」

梨花の声がした。声のしたほうこうを向くとみんながいた。
彩音はいつもどおりの笑顔でしゃべっている。
結果は悪くなかったのかもしれない。私は黒板を見るがそこには衝撃的な結果が。
彩音と江藤は離れている。
江藤のとなりには性格が悪い羽田の名前が・・・。
なんだか嫌な結果になったな。うん・・。励ましの言葉もないよ。
とにかくあの手紙を渡せばいいのかな??私はポケットに手を突っ込む。
「瞳〜!!私ねこの班、最高だと思うの!!」
彩音は私にガッツポーズをしながら言ってきた。
彩音は精一杯の笑顔だった。私はどうしようもなかった・・・。
だけど、私は手紙を渡さなかった。
渡したら彩音の我慢が水の泡になりそうだったから・・。こんな私でごめんね。
梨花はそんな私を見て不思議そうだった。私・・今、そんな顔してるのかな??
おそらくしばらくはもう、江藤とはしゃべれないような気がする。
多分。
でも、本当はこうだからいいよね。

運命の歯車

結局、私と彩音は席替えから江藤と話せない日々が続いた。
彩音は一言ぐらいはしゃべるけれども、前のようにはいかないそうだ。

「体育大会の種目決めをする。」
体育委員がプリントを配り始めた。だいたい８００メートルなどしんどいのばっかりだ。
文化系の部活の私は綱引きにすることにした。楽だろうし。
そういえば部活対抗リレーで出ないといけないんだっけ??忘れてた。
走るのはそれだけだよね。うん。
ラッキーなことに私は綱引きに出ることをＯＫしてもらえた。
学年種目は棒引き。
「これ、小学校の運動会のときにした・・・。」
「またかよ・・。」
私と同じ小学校の出身の人たちは文句を言い出した。決まったことだから仕方がないと思うが。
体育委員は「文句を言うな」とだけ言った。
何とか１時間で種目決めは終わった。
私は４組に行き、彩音たちに何にでるかを聞いた。
「私は障害物競走。」
彩音はそう言った。
「私も。」
郁もそう言った。
「私は綱引きだよ。」
梨花は笑顔で言った。
「本当??私も!!!!!!!}

私は感激のあまりに梨花に抱きついてしまった。敵なのにね。
ちなみに彩音いわく江藤は１０００メートルに出るらしい。さっすが！！
「なんか、先生に速いから出たらとか言われて、江藤はいやだって言ったけどすごい頼まれてね、結局でるって言ったんだけど、男子に『えー』って言われて『せっかく、ＯＫしたのに』とかいってた。でるけどね。」らしい。
江藤らしいというか・・江藤だね。
私はとりあえず江藤のほうをみた。男子と楽しそうにしゃべっている。
ん？？女子が何人かいるぞ？？あーーーーーーー・・・。うらやましい。
私もあの中に混ざりたいな。無理だけど。
チャイムが鳴った。次は数学だ。
私はその時間、意味不明な呪文を聞いていたのであった。
数学って将来、役に立つのかね？？？変な疑問。
ちなみに４組はただいま英語らしい。あっちも大変だな。
私は問題などはサクラの答えをカンニングしてその時間をすごした。
今日は曇り空だ。
最近は晴れの日が少ない。雨ばっかりでつまらないんだよね。
私はペン回しの練習をした。失敗ばっかでつまらないのでやめた。
そういえば彩音は江藤に教えてもらったとかいってたな。
自慢するために必死に家で練習したとか・・それで怪我したとか・・。どうでもいいけど。
最近はなんだかつまらないので、何か面白いことはないのだろうか。
たとえば・・・江藤に告白をするとか・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・。
・・・いいこと思いついた♪

運命の歯車

思いついたのはいいけど・・これはちょっとやばいかもね・・。
よくよく考えれば恐ろしい内容だな、これは。
私が思いついたというのはこういうのだ。
　彩音と私で勝負をする。勝ったほうが江藤に告白してＯＫという内容。
あきらかに『だめです警報』がなっております。やめておこうかな。
冗談で言ってみようかな？？本当にはしないけどさ。
というわけで私はまどかに言ってみた。最後に冗談ってつけたから大丈夫だよね。
彩音はすごい嫌がったが冗談というとほっとしていた。
郁には言うか言わないか・・・。嫌な予感がするからやめておこう。
そんなこんなでまだプールの最終日だった今日。私のクラスの体育はあきらかに進むのが遅い。
今年のプールは見学になるのが多かったけど、最終日は入れてラッキーだった。
ちなみに彩音は見学だ。ドンマイ。今日は自由が多い。
私は郁とサクラとで追いかけっこをしたりして思いっきり遊んだ。
楽しい！！！
ちなみに半分男子が使っていて半分が女子だ。
男子は友達の水泳帽子を女子のほうに投げたりして遊んでいる。お子様だな。
江藤はというとどこにいるのか分からない。
あんまり見てたら変態扱いをされそうなのでやめておこう。男子はすぐにそういうこと言うし。
「あーやーねー！！！」
私たちは彩音に自慢をするように名前を呼んだ。彩音はみかけによらずプールが大好きなのだ。

そして、ついにプールは終了した。
嬉しいような悲しいような。
ちなみにそのプールは２ヵ月後緑色のプールになるのでした（（笑

「ひ、瞳？？？」
彩音が苦笑いで話しかけてきた。
「どうしたの？？」
私は着替えながら言った。
「あのね・・・江藤が私に無関心なの！！！！！」
「は？？」
彩音が言うにはこうらしい。
じつは今日は江藤も見学だったらしくて彩音と思いっきりすれ違ったらしい。いつもなら「お前も見学なん？？」とか言われるはずなのに今日は完全に話しかけられなかった。というわけ。
「きっと、水着を忘れたんだよね。そういうことにしておこう！！」
彩音は勝手に自分で解決した。ある意味すげー。
そういえば最近・・江藤としゃべってない。さみしいな。
江藤は別に私としゃべらなくてもどうでもいいんだろうな。
だって最近・・笹川月海ちゃんのことを見てるもん。私はいつの間にか気づいてしまっていた。
いつも楽しそうにしゃべっているし・・・。気づいたのは自分だけど・・・・。
私は何故か梨花に相談していた。いつもなら彩音なんだけどね。
「聞いてみる？？」
「え？？」
梨花の突然の言葉に私はびっくりしてしまった。い、今なんていったの？？ええ？？？？？？
「江藤～？？」
待て待て待てーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
！！！！！！！！！

それはきいたらだめでしょー！！！！ばれちゃうよ！！
「江藤って月海ちゃんのコト好きなの？？って瞳がいってたよ。実際どうなの？？」
聞いてしまった。江藤は特に反応しない。ん？？なぜだ？？
私は梨花の影からそっと見る・・・。
「別に笹川のコト好きじゃねーよ？？しかも、ここにはいないし。」
「「そうなんだー。」」
私と梨花は安心して大きくうなずいた。って待てえええええええええ！！！！！！！！！！
『ここにはいないし』ってどう意味じゃ！！！！気づかんと思ったか！！
意味が分からない。ここにはいないって、このクラスに？？それともこの学校？？
意味不明なことをいいやがって。謎が増えたではないか！！
私はどうすればいいのだー！！！！
ちなみにきづいておりました。
私が頭を抱え込んで悩んでいるのを江藤が見ていたことを。

運命の歯車

私はあの時の江藤の表情が忘れられない。
にらんでるような・・・切ないような・・・・表情。
それはさておき。今日は体育大会の予行練習であります。最悪だ。
私は適当にボーっとしていたら、郁がやってきた。
「瞳！！??何で言わなかったの??」
「はい??」
私にはわけが分からなかった。何を言っているんだ???
「優勝したら告白するんでしょ???」
「い??・・・」
な、何で郁が知ってるの???言ってないのに。あーーーーーーーーーーー・・・。
誰かが言ったな。別に口止めしていなかったし、いいけどさ・・嫌な予感がする。
私が慌てふためいていたら
「ぜったい、告白しろよ！！」
郁はきつめの言葉で言った。マジすか！？
私は郁がサクラたちのもとへいくのただ見いていた。どうしようもなく。
これは告白しないといけないような感じになってきたぞ。どうしましょう。
今、言っても、失恋するだけだ。分かっている。
初めてなので告白はどうすればいいのか分からない。そんな私。
あー・・・・。消えちゃいたい。
消えたらだめだ。江藤と会えなくなっちゃうからそれだけは避けよう。
トイレに行っていた彩音が戻ってきて、真っ白になっている私を見て不思議そうにした。

・・・・すまん・・・・彩音。
何から何まで申し訳なくなってきた。世界中の皆様！！！ごめんなさい！！！！！！
何を謝ってるねんという。わけの分からない感情がめぐる心。
曇り空な心です。ちなみに空は晴れています。むかつくな。
あ！！！優勝なんてそうそうないじゃん！！１チームだけだよ？？
全部で６チームあるしね。ちなみに私は青チームだ。江藤は橙チームだ。
ふふふふ。めったにないのさ！！優勝なんて。６分の１の可能性だ。
ありえない。
とりあえず、みんなには悪いけど２位をねらうとしますか。

運命の歯車

いや・・やばくなってきました・・・。青チームがただ今トップです。

「やったー！！！！！！」

青チームが勝つたびに、となりに立っている男子が大声で叫ぶ。はっきり言って耳が痛い・・。

このまま勝つわけにはいかないんですけど・・本当に。ピンチ！！！！！！

私はとりあえず、青チームを離れる。江藤の顔を見に行きますか。

私が橙チームに行くと彩音がいた。名前を呼ぼうとしたけどやめた。

生活委員の彩音は準備が忙しい（らしい）。委員会入ってる人は大変だ。

ちなみに、学級委員の私はクラスの子守をしなければならない。してないけど。

そんなことは置いといて、江藤はどこかな？？・・・・・・いなくね？？？？

私は仕方がなく、自分の席へと戻ろうと思った。江藤はどこやねーーーーーーん！

私の予想は1組のほうに行っているか・・しか思いつかない。じゃあそれか、うん。

「瞳ー！！！」

生活委員がいる準備テントのほうから無邪気な声が聞こえた。彩音だ。

「手伝いに来てくれたの！？」

「いや・・違う。」

すみませんね、私も忙しいので・・・いろいろとね♪

「えー。それよりさ～、江藤どこにいったか知らない？？？」

「私が聞きたい。」

反射的に言葉を返してしまった。実は今から聞こうと思っていたところだ。
彩音は「あー。」という感じに納得してニヤニヤしだした。キモイ・・・。
「なんだ～、何でいるのかと思えば～。」
バシっ！！！！
「いったーーーーーーーーーーー。」
またもや反射的に頭をたたいてしまった。理由は声がでかいから、それだけだ。
彩音は自分のひりひりする頭をなでながら涙目でにらみつける。
「私さ、学級委員だから戻らないとね。」
そそくさと逃げげた。席に戻ってもひまなんだけどね。
こういう時って文化系の人たちはつまらないんだよね～。体育系だけが盛り上がるというか。
私は大して足が速いというわけでもないし、活躍する場面がない。ただ、足が速い人の活躍するのを見て「すごーい」とか言って無駄な時間をすごす。
なんて惨めな1日なんだろう。
『1年学年種目の棒引きに出る方は集合場所に行ってください。』
生徒会からの呼び出しでございます。ひまな時間終了！！！！！！！！！！！！！
「瞳、いこ！」
サクラが私の手を持って走る。私がボーっとしていたからである。
あー・・・サクラが男の子だったらこういうときに恋が芽生えるんだよね。
残念ながら女子なのでまったくなんとも変化はなし。百合じゃあるまいし。
ふと、後ろを振り返ると
「え、江藤・・・。」
後ろのほうに江藤が男子とあるいてきた。いや～、かっこいい。

手をポケットに突っ込んで、ズボンを腰の下らへんまでおろしている。かっこいい！
その少し後ろに彩音と郁と梨花が。彩音はちゃっかり江藤を見つめている。
郁が必死にしゃべっているが多分、話は聞いてないだろうな、あいつ。
私は前を向いた。これ以上見てたらやばそうなので。
「1組はこっちでーす！！！」
先生たちが生徒を並ばせている。さて、私のクラスはどこかな？？
1分もしないうちに見つけたので背の順に並んだ。私は後ろから2番目だ。
男子のリーダー的な奴がみんなに「本気出せよ！！！」といっている。
聞いてるふりをしながら聞かない。私が目指すのはそう、2位だ！！！！
「1年生の3組と4組と6組と5組は準備をしてください。」
どうやら1番に戦うらしいです。話聞いてなかった・・・・・。
私は棒引きなので狙う棒を探す。まっすぐ前にあるあの棒をとるか。
おそらくアレで時間が終わるだろう。練習のときはいつも1本だけだったし。
「位置について・・・・・」
体育科の先生がマイクで言った。みんな体勢を整え始めた。
2位2位2位2位・・・・目指すは2位！
「よーい・・・」
優勝はしない！！！！！！

「スタート！！！！！！！」

運命の歯車

私は先生のスタートの合図と一緒に真っ直ぐと走り出した。目指すは目の前の棒。
私はサクラと一緒にその棒をとって持っていこうとしたとき
「そうはさせないぞ！！！」
敵の陸上部の女子2名が引っ張ってきた。おいおい待てよ～。
私たちは無我夢中で引っ張ったが相手が悪い。引きずられていく。
「んーううーーー！！！！！」
サクラは顔が真っ赤になってきた。・もちろんわたしもだ。
そんな時、敵から陸上部と野球部の男子が手伝いにやってきた。これは大変だ。
誰かーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！こいーーーーーーーーーーーーーー！！！！！
声になっていないがそう叫んだ。半分ぐらい引きずられてもうだめだと思ったとき・・・
「あいつらやべーぞ！！！！！ひまな奴はいけ！」
誰かの声と一緒にたくさんの人が手伝いに来てくれた。よかった。
それと同時に向こうも仲間がいっぱい来た。来る前に必死に引っ張る。
今のところこっちが有利だ。この調子でいくぞ。私は頑張った。
そして、何とか私たちの勝利に終わった・・・っておい！！！！！！！！！

「学年の部は瞳のクラスが勝ったね。」
彩音が祝福してくれた。ちなみに彩音のクラスは2位だ。
「うん。あのさ・・彩音には言っていないことがあるんだけどさ・・・。」
実は、告白の件は彩音にはいっていないのだ。すっかり忘れていたことは黙っておこう。
私は早速、彩音に伝えた。彩音は自分のことのように顔がみるみる青白くなっていく。
「それってやばくない！！??郁は決めたことはぜったいする子だよ。」
「えー・・・。」
ふたりの間に重い空気が流れ始めた。黒い空気なかんじがする。
私はこの際だから思っていることを言うことにした。
「私ね、ふられることよりもう仲よくしてもらえないかもしれないって言うことのほうが不安。」
私は震える右手を左手で押さえた。
もう、あの無邪気な笑顔を見せてもらえないかもしれない。
あの痛みを全て包み込むような笑顔を見せてもらえないかも知れない。
あの姿を見せてもらうこともゆるされないかもしれない。
そんなのぜったいに嫌だもん！！！死んでもいや！！！
1人占めしたいとは願わない、ただ見せてくれるだけでも幸せなんだから・・・。
私が黙りこくっているのを見て彩音はただ切ない顔で下を向いた。
ごめんね・・・。ただそういう思いしか出てこなかった。
「う！！！！！！！」
彩音の顔色が変わった。私は彩音の目線の先を見ると江藤がいた。
「いまの会話聞かれていないよね??」
私は江藤との距離に不安をかんじた。あまりにも近すぎるから。
江藤はサッカー部の男子としゃべっている。楽しそうだ。

「多分・・大丈夫。」
彩音は苦笑いで答えた。多分ということは聞かれているかもしれないということ。大丈夫かな??
私たちはとりあえず解散した。このままだったらやばい感じがするので。
私は江藤のとなりを通った。一瞬なのに3秒ほどにかんじた。
となりを通ることはいつまで許されるのかな??

『部活対抗リレーに出る人は集まってください』

・・・私だ・・・。

運命の歯車

「美術部はここです！」
先生に誘導されて自分の持ち場についた。私は7番目に走る。８人までいます。
出ている部活はいくら運動能力で固めたって卓球部や吹奏楽部がいる。負ける気しかしません。
「頑張ろうね！！！！！」
はっきり言って走るのが遅いし、このメンバー・・・終わったな。
そもそも、走りたくないんですけど！！！！！！！！！！！！！！！いやだー。
・・・あ！！！！！！！！！私がゴールする場所は橙チームの席の目の前じゃんか。
江藤にみられる・・・、恥ずかしいな～。とか思いながら喜んでいる私がいる。
私はただボーっと1人目が走っているのを見る。部活対抗リレーはいまいち盛り上がりがない。
どんどん美術部は遅れていく。今から見た人には1位だと思われるんじゃないかというくらい。
ついに私の番が来た。が美咲は遅かったのでなかなか来ないし。
そのうち手芸部に先行かれた。ドンマイ・・・美術部。
やっとパスをしてもらって走った。走ったけど追いつかない。私も遅いしね。
ゴールが見えてきた。橙チームの席を見ると・・・またもや江藤はいない。
「何でーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！

ず明るい色ではない。
「残念だね～。」
彩音が大笑いできた。もちろんこいつも走りましたよ、遅かったけど。
私はあははと苦笑いで返した。できればビリは避けたかったな。みんな同じ気持ちだと思う。
「江藤いなかったし・・・。」
私のさみしそうな言葉に彩音は返す言葉がなかった。
「・・・あー・・今からサッカー部が走るからそれ見に行ってるよ・・。」
納得。どうりでいないわけだ。・・お前は走らないのか・・・。
私ははるかかなたを見たら1年のサッカー部の大群が・・・。その中にたしかにいた。
「なーんだ。つまらないな。」
「私は見られなくて正解だよ・・。」
「「・・・・・・」」
無言になった2人。あんな最悪な場面(ビリ)を見られたら人生が終わってたし。
そもそも、見てくれるかは不明です。ざんねん過ぎるだろ!!
そして、残念な2人はサッカー部が走っているのを見た。あいつは出ていないけど。
「やっぱ、運動部の男子は速いね。」
「うん。」
残念な2人は残念な会話しかできないのであった。
「・・・・つまらーーーーーーーーーーーーーーーーーーんん!!!」
彩音はついに爆発した。イメージ的には火山の噴火的な??やだ、怖いわ。
逃げたくなったので他人のふりをした。気づかない彩音。
「ぷぷ・・・。」

私は笑いを抑えながら彩音からはなれる。
「ひまひまひまひまひまひまひまひま・・・・・・・・。ん？？」
異変に気づいたのか、こっちを向いた。彩音はびっくりした。
「あーはっはははははっはははああ・・ぶーーーーー！！！！」
私は大笑いした。笑い過ぎてほっぺたが痛い。
「笑うなー！！！瞳だってそういうこと、よくあるでしょ！！？？」
彩音が文句を言ってきた。細かいことは気にするなよ。
「私たちが、合体したらどうなるんだろ？？」
私は変な疑問を持った。どうでもいいだろそれは、と後から思ったのは別の話。
「んー・・・・。顔が私で、体が瞳？？」
彩音はそういった。それはお前の理想の身長だろ。と思ったが想像した。
「・・・・キモ！！！！！！！！！」
「ぷ・・それはお前だろ。」
私の横を笑いながら江藤が通過していった。ってうおい！！！
「な、何それ！！キモくて悪かったな！！！！！！！！！！！！！」
多分、冗談だとは思うがイラッときた。
「ぷ・・ぷぷ・・。」
彩音が笑い出した。さっきの仕返しだな？？ふざけるなー！！！
「笑うな！！はげ！」
「はげてないよ～。」
「きのこ！！！！！！！！！」
「え・・・。」
私たちはいつまでも言い合いましたとさｗｗ

数分後に起こる悲劇を知らずに・・・・。

運命の歯車

「では、ただ今より成績発表をします！！学年の部からいいます。」
司会の人が1年生から読み上げていく。学年の部は私のクラスが優勝することは分かっている。
問題は、チームの部のほうだ！！も、もし優勝したらこ、告白しないといけなくなってしまう・・。
できれば、それだけはさけたいのです。優勝はしなくていいから2位で。
「では、次にチームの部です！！！3位は・・・。」
だんだん近づいていく。こんなに怖い思いをしたことがあるだろうか。でも、怖いとは少し違う。
「ではでは！！！1位の発表です！！！第1位は・・・。」
効果音が放送で流れ始めた。神様！！お願いです。優勝はやめてください！！！！！！
効果音の音が止まった。
「優勝は・・・青チームです！！！！！！！！！！！！！」
一瞬、時が止まったようにかんじた。まって、何でみんな喜んでるの??
ああ・・神様なんていないんだな。私はこれから江藤にふられて、悲しい人生を送るんだね。
「瞳～、やったね。」
みんなは私に声をかけていく。多分、学級委員だからだろう。別にいいのにね。
「そ、そうだね！！」
私はちゃんと笑えてたかな??
自分の都合で負けてほしいとか考えてた私にやさしく声をかけないでほしい。
わたしは・・・ごめんね・・、彩音。私は告白するしかないみたい。

冗談でも言わなければよかった。
もしふられたら・・彩音のばんだよ??私は諦めるから・・せめて
彩音だけでも・・。

「ＮＯ・・・付き合えない・・・・。

って言ってたよ。・・・まぁ、分かってたことだしいいんじゃない??」

郁が笑顔で言う。そして、私のとなりを鼻歌を歌いながら通り過ぎた。
「え・・・。」
そっか・・私は告白したんだった。手紙を渡したんだ。授業が終わってなかったから郁に渡して・・。
そうだ、今ふられたんだ。私の恋は終わったんだ。いいんだよね・・・これで。
『分かってことだしいいんじゃない??』
・・・なにがいいの??分かってたら失恋してもいいの??私の思いはそんなものなの??
「瞳??」
彩音が心配そうに私を見た。
何でかな・・??涙がまったくでないんだよね。目はものすごく熱いのに涙はでない。
今日は全然お茶を飲んでなかったからかな??関係ないか。
「あはは・・・そ、そうだよね!!分かってたことだしもういいや〜。」
精一杯の笑顔で大声でそう言った。全然そんなことは思っていないけれどもそう言った。
「まぁ、もう1回告白したら??なんか、昔さ何回も告白してくる人がいてうっとしいから付き合ったとか言ってたしさ。何回もしたら付き合ってくれるんじゃない?ファイト。」
「ふざけんな!!!」って言いたかったけど口をつまんだ。
郁には分からないんだ・・この思いは。

運命の歯車

「飯島さん・・テストの点数が悪いですね。土曜日に再テストをしましょう。」
「・・・はい・・・。」
私は今日失恋してから今までの記憶がない。どうやって家に帰ったんだっけ？
私はバツだらけのテスト用紙をじっと見つめた。見るだけで嫌な思いになる。
私は自分の口で思いを伝えれなかったことより悲しいことがある。
それは・・・涙がでなかったことだ。どうしてか、涙がでなかった。
「では、今日の授業を終わります。」
まだ実感がないのか・・・それとも
「私がまだ子供だから？」
私がそうつぶやいたとき、
「飯島さん、土曜日は再テストだからちゃんと来てね。」
数学の先生が念を押すように私に言った。
「はい・・・。」
私は苦笑いで返事した。土曜日はゆっくりとパソコンをしようと思っていたのだが。
私はその日はあえて階段を使わずにエレベーターで降りた。普段は階段。
ゆっくりと降りていくなか、今日の記憶がよみがえる。
思い出すのは手紙を書いている場面。そういえばもう1枚書いてたな。
『ばーか。』
あきらかにケンカをうっている内容で、渡した後きっと殴られることがみえみえだ。
だけど、こっちを渡せばよかった。そんな後悔がでてくる。

空を見ると満月が雲に隠れていた。見えるけど見えない。
何故か江藤の顔が浮かんだ。あの笑顔はもう見れないのかな??2度と。
私は自転車に乗って進んだ。
『分かってたことだしいいんじゃない??』
うるさい
『まぁ、もう1回告白したら??』
うるさい！
『何回もしたら付き合ってくれるんじゃない??』
うるさい！！
『ファイト。』
うるさい！！！
郁の言葉が何度も頭の中を駆け回る。郁はただ私を元気つけようとしていたのかも知ればいけど・・。
余計なお世話だ。
分かってたことって、確かに分かってたことだけどよくはない。
もう1回告白して付き合えるんだったらすでにOKが出ているはずだ。
なんで何回も告白をしないといけないんだ。ウザイって言われるのはごめんだ。
ファイトってそう簡単に言わないで。
多分・・今の私に何を言っても無駄なんだと思う。
悲しいのに・・・涙がでない私はだめなんだ・・・。まだ子供なんだ。
彩音も失恋すればいいのに・・・。
そんなことを考える私も子供だ。

「好きです。付き合ってください。」
「え・・？」
学校の前でいきなりのことだった。私の事がすき？？
・・・この人、誰だろう。多分、3年生だと思うけど知らない人だ。
顔は普通の上のほうかな？？かっこいいに入っても大丈夫な・・。
・・・・・この人と付き合えば江藤のことを忘れられるかもしれない。
だけど・・・・。
「気持ちは嬉しいんですけど、ごめんなさい！！・・好きな人がいるんです。」
私は素直な気持ちで答えた。名前を知らないってことは黙っておこう。
3年生は一瞬びっくりしたような顔をした。
あれ？？あ・・・・ドッキリっていう可能性を忘れていた。ドッキリだったらどうしよう。
3年生は苦笑いでこういった。
「そっか・・・・。それだったら諦めるよ。飯島の恋が実るといいね。」
私はドキッとした。昨日失恋したばかりだから。
「・・・あ、ありがとうございます・・・。先輩も素敵な人に出会えたらいいですね。」
これは素直な気持ちだ。決して嫌味でもない。
「・・・。ありがとう。」
3年生はそう言って家に帰って行った。江藤が帰る方向と同じ。
『飯島の恋が実るといいね。』
私はその言葉に涙がでていた。なんでだろう昨日は涙がでなかったのに。
体の中の水分が全て出てるんじゃないかというくらいの量だ。
「うう・・・。」
私は必死に涙をふきながら人通りの少ない場所に行った。

なんて優しい人なんだろう。多分しばらく会えないんじゃないかと
いうくらいの優しさだった。
私は失恋したからライバルの不幸を望んでしまった。
なのにあの人は幸せ願った。
私は最低だ・・・・・・・・・。

私はその場所でずっと泣いていた。

思いが届くまで

「里井くん・・かっこいい～。」
アニメの情報雑誌を見ながらつぶやく私。現実逃避中でございます。
ちなみに里井くんとは恋愛アニメのイケメンな少年だ。今は彼に恋をしているの。
「ひ、瞳・・・。」
彩音は1冊のノートを持ちながら私の名前を呼んだ。ノートは私と彩音の交換ノートだ。
「なに？」
緩んだ顔では私は答えた。江藤には見せられないな・・・この顔。
「交換ノートの内容なんだけど・・・。」
私は今日の朝書いて彩音に渡した。1分で書き終えた内容は
『私は2次元で生きます。2次元最高～』という内容。
私は別に深い意味はなくなんとなく書いた内容だ。なんかだめだったのかな??
「手抜き・・・。」
そこかい！！！！！！！ちょっと期待した私が馬鹿だった。
私は雑誌に目を戻した。あ～、里井君かっこいい☆★
彩音は苦笑いでこっちをじっと見ていた。おそらくどう反応すればいいのか分からなかったのだろう。
私はページをめくった。美少女系のアニメになり私は閉じた。
「もー！！何で、閉じるの～！！??」
となりからのぞいていた郁が文句を言った。すみませんねー・・・・・って、お前そんな趣味が・・。
私は雑誌を郁に渡した。郁はページをめくってお茶を飲みながら読み出した。
目を輝かせながら読んでいるのはいいけど、変なページなのは笑え

る。
「瞳・・・。」
彩音が心配そうに私を見ていた。そんな目で見ないでください。
彩音は消しゴムを筆箱にめがけて投げた、が入らなくてとなりに落ちた。
「何をイライラしてるの??」
私はその消しゴムを筆箱に入れながら聞いた。ついでにチャックも閉じておこう。
「本当にそれでいいのかな・・・。」
彩音は小さい声で言った。私には聞こえるがみんなには聞こえない大きさ。
私は筆箱をたてにたてた。
「こういう運命なんだよ。仕方がない。」
私は少しかっこいい言い方をしてみた。かっこ付けではない、強がりだ。
「失恋したからって諦められるの??」
決定的な一言だが、失恋は失恋、私にはもうどうしようもないんだ。
「・・・諦められないに決まってるじゃん。」
私はがうつむいたのにはわけがある。こんな情けない顔を見せるわけにはいかないんだし。
彩音は靴下をあげた。
「そ、そうだよね。」
彩音は申し訳なさそうに頭をかいた。別にかゆいわけではないだろう。
しんみりした空気が流れたので会話を少しかえることにしてみた。
「あ、彩音はどうなのさ、告白とかさ。」
私の話題ではなく彩音の話題だ。彩音はびっくりしていたが元通りの顔に戻った。
「別にどうでもないけど・・・変化なし。」
聞いてはいけないことを聞いてしまったようにかんじたのは気のせ

いだということにしておこう。
今回は逆に私が申し訳なくなってきた。１８０。かえれば良かった。
すみません。
私はとりあえずイスに座った。
「・・・・私のせいで江藤と気まずくなったわけではないよね??」
なんとなく気になっていたことを聞いた。私のせいで彩音の恋を終わらせるわけにはいかないし。
「大丈夫だよ。」
彩音は笑って見せた。ならいいけどさ。
「あーあ。新しい恋でも起こらないかな～??」
私は大声で言った、精一杯の強がり。江藤よりいい人なんていないよ。里井くんは別だけど。
みんなはびっくりしていたが聞かなかったことにしているようで、話をして絵を描いている。
私はかばんに入っていたもう１つの江藤への手紙を破ってすてた。
誰にも見られないように。
中庭ではサッカー部が練習をしている。黙々と。
私はもうそれを見ることしかできなくなったけど・・・・まだ、好きです。

思いが届くまで

「あー・・・・。」
私は歌がオンチだ。オンチ大会で勝てるんじゃないかというくらい。
そんな私は歌が苦手というべきだろうか・・そんな私に憂鬱な行事がやってきた、文化祭だ。
文化祭といっても作品の展示や合唱をするだけだが、憂鬱だ。
私たち1年生はただの合唱をする。ちなみに3曲も歌うのだ。
「では、パートごとに分かれてください。」
私はアルトのパートだ。今まで声が高いって言われてきたけどついにアルト！！！！
しかし、その幸せはサクラの言葉によってつぶされた。
「アルトって声が高い人が集まってるよね。」
「な・・・。」
返す言葉がない。確かに高い人が集まっているし。
あー・・・なんでこうなったんだろう。考えても分からないけど。
私はアルトが集まる教室・・・第1音楽室に向かって歩いていた。
そのとき前から何故か江藤が歩いてきた。何で戻ってきてるねん。
私は江藤の顔をチラッと見た。
「！！！？？？？？？？？」
江藤がこっちをじっと見ている。なんか知らないけど、やばい！！
何かがやばい！！
私はサクラと話して何とかしようという作戦に出た。
「あの雲綺麗だね。」
「今日は曇りですよ。」
「・・・・・。」
しくじったあああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！

あきらかに怪しい行動??をしてしまった。なんてこった!!!!!
私としたことが・・。
「瞳、目は大丈夫??」
サクラが冗談で言ってきた。はい、大丈夫です。
私は後ろを振り返ったが江藤は途中にある教室に入っていってしまっていた。
何をしに行ったのだろう。今でも分かりません。

「Ａｈ――――――――――――。」
あきらかに私だけ音をはずしてしまっている。かわいそうな私。
しかし、誰も突っ込まないのがもっと悲しい。誰でもいいから突っ込んでください。
廊下からは男子の歌声が聞こえた。この中に江藤の声が・・・・・。
もっとも、まじめに歌ってたらの話だけどね。
「だるー。」
不良の女子どもが座り始めた。そこへ先生たちが注意している。
「立ちなさい!!!」
そのたびに練習が中断されるのだ。ていうか、アルトって不良多すぎだろ。
学年の不良が全員そろっているように見えるのは気のせいですかね???
私は音楽ファイルを見つめた。楽譜を見てしっかりと音をとらなければ!
といっても分からないので諦めた。なんで、みんな分かるのさ〜・・・。

思いが届くまで

「・・・・恐ろしい、夢を見た・・・・。」
私は布団の上で顔を青ざめていた。恐ろしすぎて言葉にならない。
ゾンビが包丁を持って追いかけてくるとか怖すぎる。あっという間につかまったし。
「瞳！！！早く起きなさい！！」
お母さんが私がまだ布団の上にいるのを見て怒鳴った。あー、怖い。
「はいはい。」
私はひとまず布団から出た。今日も学校はある。嫌だな。
まず、江藤に会うのが嫌という気持ち。
会いたいという気持ちがわずかにある。ほとんどは
複雑だな。好きなのに。
「ひーとーみー！！！！！」
パンを持ってボーっとしている私を見てお母さんは怒りが頂点に来ているようだ。
「い・・・。」
私はあわててパンを食べて着替え始めた。
制服もはじめはぶかぶかだったのに今はぴったりだ。このまま小さくなったりはしないよね？
制服だって安くはない。お金がなくなれば嫌だし・・ってそんなことはどうでもいいや。
私は靴を履いてまどかとの待ち合わせ場所に急いだはずなんだけど・・・
「あ・・・。」
「うげ・・・・。」
エレベーター前にいたのはとなりのとなりの家のキモ兄弟の弟。４年生だ。

「最悪・・・。」
私一言そう言ってキモ弟の横に立った。いやだ・・・。
ちなみに名前は大原靖史(やすし)。兄は大原征(せいし)氏だ。
エレベーターが着たので私たちは乗った。この密室に2人ではいるなんて・・オぇ～～～。
さっさと1階につかないかとまっていると何故か4階でとまった。
「！！！」
入ってきたのは・・川田だ・・・。私が前（？？）好きだった人。
「こんにちは。」
何故か、敬語を私に使ってくる、不思議な子だ。
「こ、こんにちは。」
私は片言になってしまったが気にしない。靖史はそんな私をじっと見る。
いつの間にか好きじゃなくなっていたな・・・。最近は江藤ばかり・・・・。
何故か泣きそうになったので私は下を向いた。2階で小学生2人は降りた。
私はまどかに会う前に涙を拭いてはしった。

学校に着くと靴箱はすいていた。
「らっき～」
私とまどかはのんきにはいったのはいいんだけど・・・・
「うげ・・・。」
そこにいたのは江藤だ。まさかこんなところで会うなんて・・・予想外です。
「あー。」

まどかは苦笑いだが、私は笑えなかった。ちくしょう。
江藤は私の存在に気づいた瞬間に目が合ったが逃走。
別に走っていったわけではないがなんだか焦っているように見えた。
確かにふった子に会うのは嫌なのかもしれないね。私はそれでいっかと思っていると思う。
「・・・・・。」
私は階段を上がった。遠くのほうにも江藤は見えない。歩くのはやっ！！！
彩音のクラスの前には江藤がすでに友達としゃべっている。
またもや目が合った・・・、なに見てるんだ私は・・・。
2秒ほどあった後に江藤の目は右、左と泳いだが後ろを向いた。
「何がしたかったんだろう・・・・。」
私は自分の教室に入った後、荷物を置いた。

「今日は何をしようかな？？？」
いつもどおりの日々。江藤とはしゃべれないけれど。

思いが届くまで

最近、なんだか江藤は笑っていないようにかんじる・・・。かんじるだけだからわからないけど。
「・・・？？」
切ない表情の江藤を見るたび私は不思議な気持ちになった。ふられたのにね・・・。
「え・・・。確かにそうかもね。」
彩音に言うと彩音も気づいていたようだ。彩音は心配そうな顔つきになった。
も、もしかして私が告白したのが嫌だったとかじゃないよね？？？不安だ。
「多分、江藤の地位が変わったからだと思うよ。」
「は？？」
「最近騒がなくなったかも。」
彩音は心当たりを探すような感じだった。
「へ～、男子もいろいろ大変なんだね～。」
私は手に持っていたゴミをゴミ箱に入れた。教室はガヤガヤしている。
「そうだ！交換ノート渡すね～。」
彩音はかばんからノートを出して渡してきた。いつの間にか、落書きの棒人間が増えてるし。
私はその場にしゃがんで読み始めた。多分地面は汚いだろうな・・・。
「へ～。」
私は彩音の情報を読んでいろいろ納得したりした。曲の替え歌などの話だが。
私が読んでいると、なんだか後ろに変な感じがした。私は嫌な予感がして後ろを振り向いた。

「ぬ！！！！！」
後ろにはちょうどノートの内容を見ながら通り過ぎる江藤がいた。
「・・・・あーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」
彩音も気づいたらしくてものすごいあわててた。内容見られていないよね！！？？
私たちはものすごいあわてた。も、もし見られてたら・・・考えたくない！！！！！
彩音のほうの内容はいいけど・・私のほう・・・この前の目があった話だし！！！
やばいやばいやばい！！！私、ピンチ！
そもそも、何勝手に見てるんだよ！！あのナルシストめ。
それからというと私は、江藤の話しをあまりしないようになりましたとさｗｗ

「ん？？」
郁は驚きの顔になった。
「だーかーら！！！俺は飯島のことなんとも思ってないからな！！！！！！」
江藤は少し大きい声で怒鳴った。
「何で、私に言うのよ。」
郁は「自分で言えば？」といいたい気持ちだった
「言っとけよ！！！」
江藤はそのまま教室を出て行った。

思いが届くまで

その日の休み時間は、なんだか静かな感じがしたのは気のせいだよね??

「ふー。」

私はため息をつきながら彩音のクラスへと入った。いつものようにうるさい教室だ。

江藤の姿はない、おそらく他のクラスへと行ったのであろう。

私は彩音のほうへと行こうとしたとき、

「瞳。」

声がするほうを振り向くと、そこには郁がいた。私は郁のほうへと向かった。

私が郁の席へと着くのを確認すると、郁は笑った、嫌な予感がするのはなぜでしょうか。

「あのね～、さっき江藤が・・・、」

ほらー!!!!こういうことだ、ろくでもない話に違いない!!!!

「江藤が何?」

私は不機嫌に答えた。いやだー!聞きたくないー!!!!!

「なんか～、授業中にいきなりさ、『俺は飯島のことはなんとも思ってないから。』とか言ってた。」

ズキッ・・・そんな感じの話だとは分かっていたけど、本当だったら胸が痛い。

「・・・なんで、それを直接私に言わないわけ??」

私は1つの疑問を郁に言った。もしかしたら江藤の考えが何か分かるかもしれない。

「知らない～。」

郁は他人事のように答えた。あー・・・こうなるとは思わなかった。

そのとき、扉から江藤が入ってきた、なんかやばいかも。

「まー、これからもいっぱい告白しちゃえ！！」
郁のどでかいこえは教室中に響いたであろう。
おい！！！！！なに、でかい声でへんなことを言っているんだあああああああああ！！！！！
おそらく江藤に聞こえていたであろう、ついてないな・・私。
その後のことは知らないけど、江藤からは何も言われなかった。不思議・・・・。

「・・・私は何をしているんだろう・・・・。」
そうつぶやいたのであった。

思いが届くまで

「あーあ・・・練習めんどくさいな～。」
何故か文化祭という気分に乗れない私は、体育館へと続く道を歩いていた。
1年生は4階に教室があって体育館は1階にある、長い道のりだ。
おまけに私は背が高いため、背の順ではうしろのほうにいるのだが、まったく友達が周りにいない。
だいたいはグループが違う女の子たち。つまらないな～。

「では、1組から順番にひな壇に乗っていってください。」
私は1組がのぼるのをじっと見ていた。1組には知らない人たちがたくさんいる。
中学校に入って半年たつのに・・・江藤とあってからもう半年か・・・。
私は自分のクラスが呼ばれるまでの間、不思議な感覚になった・・・。
私は自分のクラスが呼ばれたのと同時にひな壇にあがった。
「では、文化委員さんに練習の始まりの挨拶をしてもらいましょう。」
先生が静かになったのを見てそういった。正直そんなのどうでもいいんですけどｗｗ
文化委員が何人かひな壇から降りてみんなの前に立った。
「宕江藤です。今日はみんなで綺麗な声を体育館中に響かせましょう。」
宕江藤という少年は大きな声でそう言った。
宕江藤って・・江藤と似た名前だな、どうでもいいけど。私は笑いそうになった。

その頃の宕江藤という少年にはそんな認識しかなかった、そんなことは置いといて。
ピアノの伴奏者はピアノを弾き始めた。綺麗な音色だ。
私はアルトのパートを歌った。

無事、練習は終わった。
私たちは教室へと戻っていった。
そういえば江藤を見ていないような気がするのは気のせいだよね？
？？？

思いが届くまで

ついに文化祭がやってきた、悪魔の何故か1年だけは地べたに座って鑑賞する会だｗｗ
私は冷たい床に座った、一気にさむかが体をおそったのだ。
「寒い・・・。」
前には彩音と郁が座っているがしゃべるには遠い距離である。私は黙った。
文化委員と校長先生が開会の挨拶をしたかと思えば、吹奏楽部が演奏を始めた。
今年に流行した曲ばかりだが、私には興味がない曲ばかりでつまらなかったことは黙っておこう。
私にはつまらない合奏は３０分も続いた。すごかったのはすごかったけどね。
吹奏楽部の演奏が終わると早速、１年の合奏が始まった。１組からひな壇にあがる。
歌っている間はただ歌った・・・。

「そういえば、江藤は??」
午前の部が終わり、昼休みに私は江藤がいないことに気づき彩音に聞いた。
「あー・・休み。」
「え?」
や、休みだとおおお

「めっちゃ、さみしいよ。」
彩音はさみしそうに笑った。ただの休みなだけなんですけど・・・。
「1年生は展示物を見に行ってください。」
放送がかかった。なんだかつまらない文化祭だ。もっとさ、パーッとしようよと思った。
まずは美術室の作品でもいくか。
みんなはスタンプ目当てで見に行く、ちゃんと見に行く人なんていない。
「はい、上手ですね。」
だいたいの人は感想のところにそうかく。ちなみに私も。
そういえば・・この展示物を飾るときは大変だったな・・・・。

「美術部は邪魔やから外にでて!!!!!」
ウザイ顧問に準備室に追いやられた私たちは、しぶしぶ狭い準備室にこもる。
全員は入れなくて廊下にはみでた人も何人か。吹奏楽部の邪魔だ。
美術室には美術係の人たちが顧問にこき使われている、かわいそうに。
「そういえば、江藤は??」
美術係の江藤の姿が見当たらない。
「先生が間違って美術部っていったから来ないよ。」
郁は大笑いしながら言った。おい・・先生・・・。

私は展示物を見ながら思い出した。顧問に関してはイラッとしたが気にしない。

思いが届くまで

「あきらかにおかしい・・・。」
「何が～？？」
険しい顔つきの私を見てサクラは聞いた。
「おかしいといえばすべてがおかしいけど、まず・・・・（省略）
なぜ！！！江藤は休んだんだ！！」
「・・・知らない。」
私は頭の中が真っ白になった。謎のことばかりを言っている自分が馬鹿らしくなったのはその数秒後のことだ。冷たい風がふく中、私はなぜ人間は髪の毛があるのかが不思議だということを語っていた。その後に、江藤の話という流れだ。その間、サクラは生温かい目でじっと私を見ていたのだ。
「そもそもおかしいのは、閉会式でこのことを言っているのがということではないか！！」
江藤がいないという悲しさでわけが分からないことをいっている私は置いといて、今日の感想を言おうと思う。

☆感想☆

その１　しっかり歌えたからよかったです！！
その２　江藤がいなかったからつまらなかったです！！
その３　３年生のミュージカルがかっこよかったです！！
その４　自分の作品を見てむなしくなりましたー！！

その５　校長先生のお話が長かったです！！

その６　ちくしょう！！何で今日は委員会があるんだよ！！

以上です

というわけで時の流れは速いもの、委員会です！！

「ぽ、ポイントハイクウウウウウウウウウウウ！！！？？？」
私は担当の先生から衝撃的なことを聞かされた。今回の遠足ではポイントハイクをするようです。おい！！ポイントハイクはやめてください。なぜなら私は歩くのは大嫌いだからです！！！！なんていえるか！！！！！
「ポイントハイクかー。」
「いいと思うぜ。
「うん！！」
何でみんなは楽しそうなの！！？？ぜったいにこれはしんどいよぜったい！！聞いたかんじ、山の中っぽいし・・・とにかくこれはだめだ。
「飯島さんもいいと思わない？？」
「・・・うん！！！！！」
ちくしょう！！！自分にうそをつくとか悲しすぎるぜ！！！文化祭が終わったと思えば遠足って・・。
こんなのってないよおおお

思いが届くまで

「待て待て待てええええええええええええええ！！！

「まさかの江藤のとなりなんだよ！！！」
「・・・・そっか・・・・。」
「ねー、彩音。」
・・・・・なるほど、彩音はラッキーだったというわけだな？？ふざけるな！何で私ばっかり。

思いが届くまで

「いーやーだー！！！！！！！！！」
まだ、あの席は嫌だといっている少女がごく1名います。私よ☆★
「うるさいなー！！俺だって嫌なんだよ！！・・・こんなぶりっ子と・・・。」
「あ！！？？」
私は声が高くてよくアニメ声だと馬鹿にされている。だから声をつくっていると誤解されがちだ。実際はまったく作ってないし、そういうつもりはない。正直、迷惑だ。はら、よくいるじゃん、整形をしていないのにしているといわれている芸能人とか。それと一緒だ。
「かわいい子がぶりっ子でも許せるけど、普通のお前じゃな～。」
山瀬が私の顔を見てため息をついた。
「普通で悪いございますね！！」
あー！！！！！！！むかつく！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8536x/

君との空

2011年12月11日21時52分発行